

平成17年度

# 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書 【Ⅰ】

脚本・台本の現状と管理・保管の実態

社団法人 日本放送作家協会



文化庁

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

平成17年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

# ご報告に寄せて

日本放送作家協会理事長

市川 森 一

わが国のテレビ業界は、その開局当初から、電波の一過性の特徴にのみ気を取られて、ビデオが普及し、収録という機能が備わってからも尚、「残す」というシステムを放棄してきました。

それがテレビ開局から五十年を経たいま、欧米におけるテレビ資産の保存と活用の充実ぶりとも比較するにつけ、わが国のテレビ資産がいかに貧弱なものであるかを悟るに及び、近年、ようやくにして、財団法人の「放送ライブラリー」や「NHKアーカイブズ」などの機関が設立され、映像物を中心にその収集と管理が図られるようになりました。

そうした気運の高まる中でも、放送台本に関しては、一向にシステムティックな収集や保管がなされない現状を憂慮したわが日本放送作家協会では、三年ほど前から、国会の総務会や関係行政機関、地方自治体、テレビ関係者等に、過去五十年間散逸に任せていた放送台本の収集と保存のための施設の必要性を、さらには、長き将来にわたって、テレビ局から放送されるすべての番組台本の管理委託を請け負うシステムの確立をお願いしてきました。

放作協では、そのプロジェクトを「日本脚本アーカイブズ特別委員会」と銘打ち、足立区のご賛同の下に生涯学習センター内に準備室と図書館内に収集台本の臨時保管室をご提供いただき、活動を開始いたしました。

そしてなによりも、この運動の原動力になりましたのが、文化庁のこのプロジェクトに対する深いご理解と、向こう三年間の活動研究費の助成でありました。

今般、ここにわれらの研究活動の成果のご報告をさせていただきますと共に、日本の放送文化の発展に務めるこのプロジェクトへの、さらなるご協力とご支援を厚くお願い申し上げる次第でございます。

<目次>

日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【I】

脚本・台本の現状と管理・保管の実態

1	「ご報告に寄せて」	市川森一
2	目次	
3	テレビ放送開始日の番組欄	
4	「日本脚本アーカイブズ調査・研究報告【I】発行にあたって」	南川泰三
7	実態調査部報告	部長 津川 泉
27	アンケート部報告	部長 安達 充
53	保存収集部報告	部長 香取俊介
66	「脚本・台本アーカイブズの課題」	水原明人
67	議事録	
71	組織図	

# ラジオ・2025

1日(日曜日)

ラジオ東京	NHK	NHK	日本文化
<p>ニ 夜8時をのぞく毎正時</p> <p>一 ス きょうの招帖毎日新聞</p> <p>6 15 ロージュ・ワグナー合奏 閉心曲のポスト</p> <p>7 10 天気予報、今日の話題 20 スポーツと切手 岡本繁 40 ベニー・グッドマン楽団</p> <p>8 05 絆「希望の朝」宮城道雄 20 手紙津村秀夫三島由紀夫 40 男のセロリ R.R.劇団</p> <p>9 10 ちえのわくら 45 きらねえたん「にじの 詩人」原田洋子他</p> <p>10 15 ビアノ「アタベスク」著 ドビュッシー他原野三郎 30 物語「藤太」滝沢修</p> <p>11 05 歌 渋谷のり子、北村雅 章とファンタジー楽団 30 ルーテル・アワー</p> <p>12 10 笑人うた合戦 司会 藤 辺アナウンサー</p> <p>1 05 チャイコフスキーの眠れ ぬ美女他 原野、上田仁 40 柳才 トップ・ライト</p> <p>2 05 政局の無点 宮武信、中 正雄、島村幸三、石井文 治</p> <p>3 05 相模日本一 横綱綱打式 訪問 鶴里他、手取入式 全日本アマチュア相撲</p> <p>4 05 歌 岸村謙、三条町子 30 舞合中絶「一条大彦」 都殿の場 市川美津子他</p> <p>5 05 にじの歌合戦 30 駿馬天狗「青面夜叉の巻」 亀田正男、辰巳柳太郎他</p> <p>6 05 転換社債とは 山本文雄 15 劇「蛇と鳩」丹羽文雄作 本郷秀雄、水城蘭子他 30 ポルチニア音楽 坂本勲 一楽団 歌 小田薫</p> <p>7 10 録音ニュース 20 柳才「英語狂時代」ヤジ ロ、キタハチ、落語 「明馬」桂石女唄</p> <p>8 0 ハローサンデー「今日は 家政婦の巻」丹下、小野 田、河井、十朱、千葉他 30 柳辺弘とスターダスト 歌 ベギー紫山、荻苑</p> <p>9 05 劇「ママの日記」木暮実 千代、信欣三、岡田茉莉 子、真木栄介 40 ニュース・ストーリー 「谷川岳に挑む」</p> <p>10 05 ニュースから(毎日記者) 20 三國志「臣道の巻」増長 冠 語り手 小沢栄 35 歌謡曲 はん子、青木光 十、久保幸江、奈良光枝</p> <p>11 10 柳うた、江戸ばやし 下 谷小つる他○R.R.だより</p>	<p>午前 8時7時9時正午 午後 3時5時7時9時10時11時</p> <p>15 ハモンドオルガン独奏 40 尋ね人週刊新聞論調</p> <p>15 湯水と電力事情(佐久) 45 対談 千葉雄次郎、岡立 世論調査所 小山栄三</p> <p>0 音楽の泉「スペインとホ ヘミアの音楽」解説 堀 内歌三 恋は魔術師他</p> <p>15 ロシア民謡 名古屋放風 30 光を掲げた人「高野長英」 小山野喜他</p> <p>0 アメリカ電話 安双三枝 15 二月ラジオ子供の歌 45 週間録音ニュース</p> <p>0 謡曲「嵐山」武田光寛他 歌と楽音集 吉屋謙他 30 阿波だより</p> <p>15 のど自慢全国コンクール 神奈川県決勝実況(横浜 市湘南高校講堂から)</p> <p>0 討論「今後の労働運動は 如何にあるべきか」藤野 敏三、西田進、鹿内 信</p> <p>0 NHK東京テレビ開 当って古畑会長のあ つち他 藤道行初音</p> <p>05 家庭クラブ会子供劇 ノ山第一訪問歌 良夫談物 28人目</p> <p>0 東照 メンデルスゾ の六つの合唱曲他 30 私はだれでしょう</p> <p>15 歌の本 時計の親子 三太三喜まる物語「 と花子の夢」島村謙</p> <p>0 国会討論会「先週の から」水田三喜男、 鹿太郎、水谷長三郎、 田博雄、司会 藤野</p> <p>15 録音ニュース 30 今週の明星 藤島昇、 園シヅ子、高倉歌 一月夜、アイルランド マドロスシャンソン</p> <p>0 柳才「極端な話」一 道雄、落語「そばや」 ユーマア園場 コメ 「暖かい一服」他 30 シュエ、三木トシロー</p> <p>05 ニュース解説 館野 15 話の泉 有木邦太郎、 トウ、ハチロー他 45 アンケート「女の言 とかく男は」杉村春 彦</p> <p>15 今日の世界「ユーゴ スラビア」小松清、中 45 社会探訪「留守家族」</p> <p>10 ハーボ・マルクス 20 詩朗読 中原中也作</p>	<p>午前 8時 午後 1時(土日休止)8時</p> <p>0 朝の祈り 千葉大樹他 30 子供の情景 シューマン他</p> <p>0 私たちの習性研究 30 ロマンズ 渡辺長調 ルビ ンシテイン作他</p> <p>15 柳友だより 30 温泉村を訪ねて 45 ラジオ体操</p> <p>0 文壇時評 水井電男、大 岡昇平、山本健吉 30 二年おしのお茶くら問題</p> <p>0 メンデルスゾーンの鋼琴 協奏曲水稲潤他 モンパ ラン、N響(再)</p> <p>0 木村十四世名人対塚田九 段 第二局 解説 坂 口八段</p> <p>0 交響曲「イタリア」夏 夜の夢 メンデルスゾ ーン、フルート協奏曲ニ 長調 モーツァルト、ピ</p>	<p>午前 8時7時9時正午 午後 2時5時7時11時15分</p> <p>10 グノー作のミサ曲 45 パンゼラの独唱</p> <p>15 木暮独奏 朝吹奏一 30 お話「さるのかんちゃん」 お香とうた</p> <p>10 独唱「ひばり」他 矢野 20 煙草のみ心得 宮木高明 35 もの知学校 日置一</p> <p>15 株式入門 30 江利チエミピット集 45 宮城まり子訪問</p> <p>0 黄金のリズム ジュニ 15 ハモンドオルガン 45 ショパン集 石浜和子</p> <p>0 人物を語る「吉田茂」歌 者小路公共○歌場古二 28 映画界裏話 森富太郎</p> <p>15 落語「花見小僧」円澤、 野曲実道楽 やなぎ、萬 吉 落語「やかん」金屋 0 株式討論会土曜第三節他</p>

テレビ本放送開始日の新聞ラ・テ欄

8	家政婦の巻」丹下、小野田、河井、十朱、千葉他	30
30	柳辺弘とスターダスト歌 ベギー紫山、荻苑	
05	劇「ママの日記」木暮実千代、信欣三、岡田茉莉子、真木栄介	05
40	ニュース・ストーリー「谷川岳に挑む」	45
05	ニュースから(毎日記者)	15
20	三國志「臣道の巻」増長冠 語り手 小沢栄	45
35	歌謡曲 はん子、青木光十、久保幸江、奈良光枝	
10	柳うた、江戸ばやし 下谷小つる他○R.R.だより	20

8 45 8 15 30 7 15 30 7 30 8 30 3 30 3 00 2 00

**NHKテレビ**

開局に当り 古垣鉄郎  
祝辞贈り竹虎、大野伴睦  
劇「道行初音旅」梅幸他  
NHKテレビニュース映  
画、米大統領就任式実況  
歌劇よも山路 藤原義江  
大田豊元雄、松内和子  
歌 古賀さと子他  
天気の話 和達清夫  
今週の明星 柳才  
現代討論「日本の太鼓」  
江口隆哉他、東フィル  
受信者の皆様へ矢野一郎  
対談 長谷真一、小松繁

8 45 8 15 30 7 15 30 7 30 8 30 3 30 3 00 2 00

**FENI-770K**

10 15 劇「開の赤太ッペ」島田  
正吾、島田太郎他  
2 00 ロサンゼルスフィル、メ  
ニューヒン プライムス  
の演奏と音響家の高野  
謙三 二長調

**NHKテレビ**

開局に当り 古垣鉄郎  
祝辞贈り竹虎、大野伴睦  
劇「道行初音旅」梅幸他  
NHKテレビニュース映  
画、米大統領就任式実況  
歌劇よも山路 藤原義江  
大田豊元雄、松内和子  
歌 古賀さと子他  
天気の話 和達清夫  
今週の明星 柳才  
現代討論「日本の太鼓」  
江口隆哉他、東フィル  
受信者の皆様へ矢野一郎  
対談 長谷真一、小松繁

## 調査・研究報告【I】発行にあたって

日本脚本アーカイブズ特別委員会委員長

南川 泰三

### 日本脚本アーカイブズとは

ラジオ放送が始まって80年、テレビ放送が始まってから50年を迎えました。

その間、ラジオ、テレビは数え切れない番組を送り出し、数々の名作、人気番組、話題作を生み出して来ました。

日本人一人一人の胸の中に必ずいくつかの忘れられない番組や心に残る番組があることでしょう。

ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ、ワイドショー、アニメ……様々なジャンルで大衆と共に生きてきたテレビ番組。まさにテレビ番組は世相を映し出す鏡でもありました。

しかしながら、残念なことにその時々の脚本や台本はほとんどが散逸し、残っていてもごく一部が局や図書館に保存されているのが現状です。

多くの名作を産み出した脚本家のシナリオも、一部で保存されている作品以外は消失する危機に瀕しています。

脚本や台本は稀少な庶民史でもあり、放送文化にとっても重要な財産です。

特にテレビ放送50年を迎えた今、この膨大な数にのぼる脚本・台本を管理、保存し、資料として体系化することが急がれます。

近年、テレビ時代を創って来た脚本家・放送作家たちは高齢化し、他界された方も少なくありません。

今、貴重な脚本・台本の発掘に取りかからなければ、この国の放送文化に禍根を残すこととなります。

今や文書保管を中心とするアーカイブズは世界の常識となりつつあり、こうした面でも我が国は大きく立ち後れています。

私たちは放送文化の拠点づくりを目指す東京都足立区内に、放送脚本、放送台本を保存、分類、管理する公開可能な施設、国際会議や様々なイベントが可能な「日本脚本アーカイブズ會館」の早期実現を目指しています。

### 日本脚本アーカイブズ準備室発足までの経緯

平成15年(2003年)3月25日、国会で総務委員会が開かれました。テレビ放送50年を機に「テレビ文化とは何か」というテーマで開かれたこの会議に評論家、田原総一郎氏、上智大学助教授の音好宏氏、日本放送作家協会理事長で、脚本家の市川森一、計三名の参考人が招致され、それぞれテレビ文化とその現状を証言、その中で当協会理事長、市川森一が

「脚本・台本は貴重な放送文化遺産である。テレビ放送50年を迎えた今、この膨大な数にのぼる脚本や台本が散逸し、日々、失われつつある。これを管理、保存し、資料として体系化することが急がれる」

と言う趣旨の発言し、超党派の賛意を得たことから、当協会内に「日本脚本アーカイブズ特別委員会」を発足させました。

以来、私どもは日本脚本アーカイブズ會館実現に向けて地道な環境づくりに取り組んで来ました。

私たちの将来的な目標は

①過去50年間に放送された脚本および台本

の収集・保存と、管理に関するIT化および、それ以降の脚本・台本の収集・保存・管理（それに伴う法制化）。

②産学協同による脚本、放送史等における研究の中核的役割を担う。

③上記の目的に沿うナショナルな日本脚本アーカイブズ会館を建設し、国際シンポジウムや国際脚本コンクール、脚本展、講演会等を行えるようにする。

同時に同会館を脚本家・放送作家の文化的拠点として機能させる。

等とし、その必要性を国、東京都、主要放送局に働きかけ、早期実現を目指します。

既にNHK（日本放送協会）は本計画の趣旨に賛同し、将来的に放送台本の供出協力を約束、民間放送連盟も前向きな理解を示し、東京都足立区も用地確保を含む積極的な協力を検討して頂いております。

そして、17年度からは三年計画の第一段階として、文化庁「芸術団体人材育成支援事業」の御支援を受けると同時に、平成17年（2005年）10月1日より、足立区政策経営部と協働で同区千住5-13-5学びピア21内に日本脚本アーカイブズ準備室をオープンさせました。

本報告書は上記準備室の諸活動の内、文化庁の助成金に準拠する日本脚本アーカイブズ設立に向けての基本的な調査・研究活動の第一次報告です。

## 調査・研究の主な内容

平成17年度第一回日本脚本アーカイブズ調査・研究は以下の課題に基づいて実施した。

①過去50年間の放送作品の内容と残存する脚本・台本の調査・研究。

脚本は、放送開始よりラジオ80年・テレビ50年の間に、恒常的に消失、拡散の一途を

たどっている。その実態を調査・研究。

★過去50年間の新聞縮刷版の番組欄をチェック、台本が作成された可能性のある番組を抽出、その総計を算出。

★NHKおよび民放における脚本・台本の保管・管理の実態調査。

★早稲田演劇博物館等の脚本・台本を一部保存している施設の実態調査。

②脚本家の実態調査～自作台本の保管状況・冊数・物故者遺族の調査。

★保管状況が悪化している者、量的に多い者など一定の脚本家を直接訪問し、実態調査

③放送作家協会会員および日本プロデューサー協会（一部）のアンケート調査。

★協会員・プロデューサーの脚本・台本に対する意識

★個々の台本保存状況と日本脚本アーカイブズに対する期待と意見。

④収集・保存・管理の方法とシステム

★脚本・台本をどのようにして収集し、保管・管理するか？

★申し出のあった物故者および寄贈希望者の脚本・台本を一部サンプル収集。

★現物保存の方法およびデジタル管理の可能性を探る。

※収集・保存・管理の研究は初年度、ベーシックなリサーチに留めたが、今後、調査・研究の重要な課題になる。

⑤平成17年度文化庁「日本脚本アーカイブズ調査報告～脚本・台本の現状と管理・保管の実態【I】」の作成

★平成17年度「日本脚本アーカイブズ調査報告～脚本・台本の現状と管理・保管の実態【I】」（冊子1000部）の作成。

これらの調査・研究を実施するため、日本

放送作家協会、日本脚本アーカイブズ特別委員会のプロジェクトチーム20名を、調査・研究項目に沿って三つの部門と総務、執行部に配置、上記三部門に部長を置いた。三つの部門は以下の通りである。

①収集・保管・管理部（香取俊介部長）

②実態調査部（津川泉部長）

③アンケート部（安達充部長）

この他、総務（熊谷知津）執行部は委員長 南川泰三、副委員長 高谷信之、顧問 水原明人が担当した。

## 厳しい状況の中で

平成17年（2005年）10月からスタートした調査・研究は会費収入で運営する当協会の資金難と、文化庁からの助成金が当初の申請額の約半額になったため、当初から厳しい状況での活動となった。

そのため初年度計画の項目は変えずに、個々の項目を縮小（アンケートの対象をとりあえず協会員に絞る、日当謝礼を削減する等）

名実ともに手弁当に近いボランティア活動を余儀なくされたが、委員各位の放送文化遺産である脚本をなんとか散逸から守りたい、さらには日本脚本アーカイブズ會館を実現したいという想いが調査・研究を支えた。

そして、委員達を励ましたのは協会員アンケートにおいて、ほぼ全員の日本脚本アーカイブズに対する理解と賛同が得られたことである。

さらには準備室発足を知ったプロデューサーや放送関係者の御遺族から、寄贈の申し出があり、サンプルとして一部お引き受けしているが、その中にテレビドラマ史に残る名作「私は貝になりたい」や「七人の侍」「太陽にほえろ！」等の脚本、またまた「ヤング720（セブンツーオー）」「欽ちゃんのどこまでやるの!？」等のバラエティ番組の記念すべき作品が発掘されたことである。

ダンボールに詰められて送られてきた脚本・台本は埃まみれで、中には触れれば崩れてしまいそうな作品も少なくない。マスクと手袋をしながら、整理するスタッフのひたむきな努力に頭が下がる。

議論も白熱した。委員の中にはドラマ作家もいれば、ドキュメンタリーやバラエティ作家もいる。キャリアも異なっている。それぞれ背負ってきた経験の違いが議論となって噴出した。

しかし、共通するのは脚本・台本に対する愛着と、調査・研究を進める過程ですます確信する収集・保存・管理の必要性だった。まだ、スタートして半年、それぞれが現役の作家としての仕事を持ちながらの作業にもかかわらず、予想以上の成果を得たと自負している。

今後、解決しなければならない課題も少なくない。

開かれた日本脚本アーカイブズ、脚本家や放送作家だけではなく、放送にかかわる多くの人たち、さらには多くの日本国民が利用できる施設にするにはどうすればいいのか？

すでに様々なアイデアや構想が生まれつつある。残る2年間の調査・研究期間の間にその展望を明確にしたいと考えている。

また、ナショナルな日本脚本アーカイブズ會館を実現するためには国の支援が不可欠である。

私たちは基本的な調査・研究の一方で、国への働きかけも同時進行で実行している。

「まずは第一歩」これが17年度の調査・研究を終えた私達の実感である。

18年度、19年度と重ねるほどに日本脚本アーカイブズは必ずしや大きなリアリティを伴って具現化することだろう。

この報告書を御覧頂いた方達は、その地道な努力の結果に、確かで、新たな放送文化の胎動を感じて頂けるはずである。

## 平成17年度 実態調査部 第一次報告書

# 脚本・台本アーカイブズ元年

実態調査部は次の3つの観点から調査を開始した。

- ① 脚本・台本はどこへ行った？
- ② 脚本・台本はだれのものか？
- ③ 脚本・台本をどう位置づけるか？

### 遺族へのアンケートが急務

脚本・台本の散逸状況調査を行った。まず作家の遺族を訪ねて、脚本・台本が現在どうなっているのかを調査した。ある遺族は丁寧に製本された脚本・台本を出してきて、ほかのものは貸し倉庫に保管してあると述べた。しかし、30年以前のラジオの脚本・台本などは廃棄して所蔵していないことが分かった。

もうひとりの遺族は放送ライブラリーに納まった。だが、家族を持たないもう一人の遺族にいたっては、貴重な脚本・台本は業者に引き取られ、その後の行方は分かっていない。

現役脚本家・放送作家の場合、脚本・台本を今後どうするかというアンケートが行われたが、遺族には行われなかった。今後は遺族へのアンケートが急務となろう。

### 演劇映画関連施設の収蔵状況調査

NHK放送博物館・早稲田演劇博物館・松竹大谷図書館などには放送作家をはじめ、声優・俳優・演出家からの寄贈が目立った。ただし、放送脚本・台本だけを特化して集めていると言うわけではない。早稲田演劇博物館から立命館大学ARCへはおよそ5万冊の放送台本が送られ、書誌情報がデータベース化されていた。

### 放送局の収蔵調査

日本テレビでは生田のスタジオ倉庫に台本がダンボールに入れられ所蔵されているらしい。ライブラリー担当者も未見であるため担当者が倉庫に行くときには御連絡頂くことになっている。ライブラリー担当者が出席する在京5社のテレビ局ライブラリー担当者の会合の際は脚本・台本の廃棄には待たをかけてほしいとお願いしておいた。

地方局——NHK福岡の場合は新局舎へ移転の際に貴重な脚本・台本は廃棄処分されたようだ。地方民放局は脚本・台本をライブラリーに収蔵するという考え方そのものがなく、番組終了後は散逸しているという状況である。唯一大阪朝日放送は資料室を設けて脚本・台本を収蔵していることが分かっている。



『専門情報機関総覧』によれば、朝日放送(株)放送資料部図書資料室。HP を見ても、資料情報には辿り着けず、概要は不明である。

## 演芸台本の収蔵状況調査

演芸台本については在京の伝統芸能情報館・大阪府立上方芸能資料館の2館を訪ねた。伝統芸能情報館は比較的新しいせいか、収蔵された台本の数はいくつ程度と思われる。作家からの寄贈というより演者の遺族からの寄贈が中心である。

大阪府立上方芸能資料館は10年間の歳月を経ているためか内容の充実振りでは伝統芸能情報館をしのいでいる。しかし、今年から民間委託が決まり、今後の行方が気になるところである。

## 脚本・台本はだれのものか？

インターネット・オークションや古本屋で台本が高値で売られている！ 台本の私物化・商品化の実態を調査した。

演劇映画専門の古本屋では脚本・台本は300円から高くてもせいぜい3千円だが、これがネットでは1万円を超えるものはざらで、中には数万円のものもある。これは「台本のアイドル関連グッズ化。中身の価値ではなく、アニメのセル画や、宣伝用ポスター、衣装、小道具類と同一視され、放送関連グッズとして扱われている」ことを物語っている。

商品化という観点からもうひとつ付記しておきたい。

昭和51年(1976年)から台本専門印刷所として脚本・台本の印刷に携わってきた三交社は今後の企業展望として、「シナリオ出版、著作権処理によるシナリオ台本の展示・販売・販促。業界後継者の育成、指導の為の学校。後継志向者のシナリオ作法と手法(監督、ラ

イター、テクニカル等指導書作成)。業界後継志望者の現実的入門、技術指導書の販売。作家志望、技術、演出志望の人々の出版上の助成と講習」を掲げているが、本来これは日本脚本アーカイブズが担うべき業務と思われる。同社には今後取材を申し込み、蓄積されたデータの使い道等々精細な調査が必要であろう。

## 脚本・台本をどう位置づけるか？

脚本・台本はこれまでにどのくらいの数があるか？ 脚本・台本の推定数をラ・テ欄から抽出調査。年代別傾向分析をおこなった。これは脚本・台本をどう位置づけるかに関わってくるからである。

放送番組80年の歴史を大正14年(1925年)以降の新聞のラジオ・テレビ欄から検証し、草創期から現在まで、どのようなジャンルの番組が存在し、その総数を集計するという膨大な作業となった。本年度は、昭和28年(1953年)以降のテレビ放送の抜き取り調査のみに絞る事を決め、ラジオに関しては翌年度より実施する。

この作業によって、脚本・台本の位置づけとともに、放送史上の新たな発見も報告されている。

## 今後の課題

今後は海外における脚本・台本の収集状況も調査研究の必要がある。

「民放、NHKと横浜市が出資する財団法人放送番組センターの放送ライブラリーはテレビの映像約一万番組を所蔵する。が、英国放送協会（BBC）の150万点超、米国のテレビラジオ博物館MT&Rの7万4千本には大きく見劣りする」（04年11月2日日経新聞「アーカイブズ零年」）果てして脚本・台本の収集状況はどのようなだろうか？

「文献後進国」（前出）といわれる日本に比べ、欧米ではアーカイブズは国家プロジェクトとして年間数十億円の資金が投ぜられている。

アジアでは韓国放送映像産業振興院（KBI）が「KBIはわが放送の未来に向かう出発点だ」というスローガンの下にアーカイブ事業を文字通りコンテンツ産業の育成振興策と位置づけている。04年の総予算は24億円。脚本・台本の収集は未調査だが、韓国放送作家協会がわが協会と連動して脚本・台本のアーカイブズ設立準備に動き始めている。

中国では北京の中国中央電視台が放送開始昭和33年（1958年）以来の40万本に及ぶ番組のデジタル保存を進めているが、脚本・台本の収集保存に関しては未調査のままである。

中国のアーカイブズは档案館と呼ばれ、国家事業として文献資料のデータベース化を進めている。「『欧米では博物館、図書館とともに、アーカイブズが、市民社会に欠かせない施設と言われてきた。しかし、日本では明治の欧化のとき、アーカイブズの整備だけが何故か抜け落ちてしまった』。安藤正人国文学研究資料館教授は指摘する。」（04年11月3日日経新聞「アーカイブズ零年」）

映像コンテンツだけではなく紙による放送記録文化遺産——脚本・台本を収集する試みはこれから50年、100年後に実り豊かなものをもたらすと信じている。そうした意味からも準備が始まった今年は脚本・台本アーカイブズ零年と位置づけたい。（津川 泉）

## NHK放送博物館

### 06年50年目を迎える世界初の放送博物館

NHK 放送博物館はそのままでは散逸の恐れのある貴重な放送関係資料を収集・整理・研究し、一般の利用にも供するという目的で昭和 31 年（1956 年）3 月 3 日に創設された世界初の放送博物館。開館時の入館者は 1 日平均 900 名（昭和 31 年（1956 年）度平均 152 名）に上った。入館者総数は、昭和 61 年（1986 年）2 月 25 日に 200 万人を記録。30 年間に収集・整理した資料は 1 万 9,680 点、図書は 6,800 冊にのぼったと『放送博物館の三十年』（NHK 放送博物館編集発行）に記されている。

ラジオ放送開始当時の大正 14 年（1925 年）から、昭和 38 年（1963 年）から NHK の看板番組となった大河ドラマ第 1 号「花の生涯」を始め朝の連続テレビ小説など、NHK のラジオ TV 番組のほとんど（特にドラマ）が保存されている。

### 寄贈台本の多彩さ



同館は単に NHK のインナーアーカイブズとしてだけではなく昭和 32 年（1957 年）から NHK・民放を問わず資料収集を呼びかけた結果、ラジオ東京の「赤銅鈴之助」などの台本が放送のつど寄贈されるようになった。日テレの「ゲバゲバ 90 分！」の台本は演出家の井原高忠がアメリカ移住を前に昭和 60 年

（1985 年）に寄贈したもの。平成 6 年（1994 年）には山本安英の使用の放送台本 660 点余りが寄贈された。これは平成 5 年（1993 年）に亡くなった山本安英が主催していた「山本安英の会」から寄贈されたもので戦前から昭和 60 年（1985 年）ごろまでの放送台本である。そのほかに、森繁久弥、臼井正明、七尾玲子などの演者からのものも寄贈者が明記された棚に収められている。

### 書き込みのある台本を収集

原則として NHK の台本はカメラマンや演出スタッフの所持していたカット割などの書き込みのある物を優先して収めている。現場の息遣いがページごとに伝わってくるアーカイブズ的収集の仕方といえよう。

書誌のデータベースは精緻な分類方法の元に管理されている。専門のソフトを外注で開発したもの。分類コードは独自のものを作成。データ入力と共に、手書きのカード、データをプリントアウトした紙媒体、台本受け入れ時の基本台帳など、二重三重にリストを保存。

保管データは①台帳の通し No. ②形態（マイクロフィルムか、紙か、機材かなど）③ジャンル分類（ドラマかドキュメンタリーかなど）が三段に区分けされた No. で判別できる仕組み。

データ入力や台帳記載は学芸員が作業。予算の関係で外注は基本的にしない。学芸員実習の学生が手伝うこともある。

台本の受け入れは、すべて寄付。予算も少ないため、台本を購入することは一切ない。作家の遺族からの寄付や、演者、スタッフからの寄贈に頼る。

閲覧方法は、台本は閉架式で入室は不可。閲覧コピーは可。閲覧は事前予約。論文などで使用する以外、単に興味本位の閲覧は断ることもある。台本は、同館以外の倉庫のほか、NHK 本体のライブラリーか川口市のアーカイブズにも保管あり。

## 立命館ARC(アートリサーチセンター)

### シナリオ約4万冊の書誌情報を データベース化

立命館のARCを知ったのは早稲田の演劇博物館の取材の折であった。所蔵のシナリオのデータベース化を委託していると聞き、早速、関西での仕事のついでに訪れた。

アート・リサーチセンターは98年に国(文部省)の補助金を受け設立。01年、02年と続けて国の補助金の採択を受ける。

総勢文系約25名、理系15名の合計約40名の教員が活動。

目的：1、立命館大学を日本文化研究、京都研究を希望する世界の研究者の研究拠点とすること。

2、世界最高水準の日本文化研究、京都研究の成果を、ネットワークコミュニケーション技術のフル活用により、世界に向けて発信していくこと。

原則的に企業、自治体、国からの資金により研究を賄っている点が大きな特徴。

ここでは「京都に位置する総合大学として、アート研究を基礎に据え、京都の芸術・文化を重視し、伝統芸能や人間の動作をともなった営み、時間芸術を媒介として、21世紀に繋げる映像芸術研究に及ぶ。」(パンフレット)という構想の下に、「デジタルアーカイブを基盤として、次世代の文化を創造するための新しい協創空間を形作っていくことをその最終ゴールと位置づけている。」(前同)

シナリオ検索データベースは、平成9年(1997年)～平成14年(2002年)9月の間、早稲田大学演劇博物館から寄託を受けていたシナリオの書誌情報について、立命館大学アート・リサーチセンターにおいて整理を行ったもの。

### シナリオ受け入れに関する経緯

平成11年(1999年)に早稲田大学演劇博物館との学术交流協定締結

●ARCにおける「京都演劇プロジェクト」平成10年(1998年)～平成14年(2002年)が、既に設置準備段階より演博と協力し、共同研究を開始。一般にあるような研究会や講演などの人的交流や情報交流だけではなく、むしろ研究資料そのもの交流という新しい共同の形を作ったもの。

●「資料の寄贈・寄託に関する申し合わせ」の締結により、演博所有の未整理資料の受託を開始。

●ARCが、演博よりの受託資料であるテレビ・映画関係資料(シナリオ・番組広報等)約10万点の整理・データベース構築作業に取り組んだ。作業終了後、ARCに部分寄託されたテレビ・映画シナリオは、昭和20～60年代までのものがあり、点数は約5万冊。現在、整理済みで書誌情報の整備されたものだけで、36,000冊となっている。

データベース化の作業を見学したが、台本の表紙・背・裏表紙をスキャンして取り込むというもの。表紙に脚本家の名前が明記されていない場合、脚本家の名前では検索できない。また、詳細検索システムでは脚本家名に該当する項目が原作者という設定になっており、原作ありの脚本の場合、原作者名のみがヒットするのであるかというような疑問点も抱いた。

前述の放送博物館の書誌データは著者名として「訳、脚色、音楽等」の著作権者名が記載されている。

これらのシナリオは、早稲田大学演劇博物館において閲覧できる。立命館大学アート・リサーチセンター所蔵のものは、コピーサービスも受付。センター所属の約4000点については、従来通りセンターで利用できる。

## 大阪府立上方演芸資料館

演芸台本の充実振りは「笑い」のメッカ大阪で垣間見ることができた。資料館は「ワッハ上方」という演芸場や稽古場のある複合施設の中にあった。以下はそのパンフレットの紹介文。

### 「残す」「楽しむ」「挑戦する」

「大阪ならではの個性的な文化である上方演芸が時代の変遷につれて風化することのないように、上方演芸に関する資料を収集・保存して、後世に引き継ぐとともに、時代にふさわしい新しい上方演芸の創造を促し、大阪文化のより一層の振興と発展に貢献することを目的として、上方演芸ゆかりの地である難波千日前にワッハ上方は開設しました。

「ワッハ上方」とは「大阪府立上方演芸資料館」の愛称です。「残す」「楽しむ」「挑戦する」がワッハ上方の理念であり、全国でもめずらしい「笑いと演芸」をテーマにした公立施設です。

懐かしい上方演芸の番組や名人芸が収録された映像ソフト、音声ソフトを個別ブースで視聴したり、演芸に関する書籍・文献資料を自由に閲覧できます。」（パンフレットより）

### 開館 10 年の充実

学芸員に案内されて入ったライブラリーにあった香川登枝緒の台本は鍵付きのガラスの書棚に入っていて著者自身が業者に頼んでハードカバーに製本されてきれいな背中を見せて並んでいた。

冊子になっている『大阪府立上方演芸資料館収蔵資料』には落語や漫才のポスターやプログラム、色鮮やかな舞台衣装、チラシやチ

ケット、自筆原稿、などにまぎって朝日放送の61年当時の「スチャラカ社員」のテレビ台本、故人の湯飲み茶碗、大入り袋にいたるまで多くの図版が掲載されていた。



漫才作家の大御所秋田實の自筆原稿を見せてもらいたいと頼んだところ、別の所蔵庫に案内され中性紙にはさまれた原稿を見せてもらったが、触らせてはもらえなかった。

劇団「笑いの王国」を結成し芦屋雁之助などを育て、毎日放送テレビ「番頭はんと丁稚どん」「細うで繁盛記」「どてらい奴」のヒット作を飛ばした花登筐（はなとこぼこ）のものはあるかと問うたら、彼の郷里の滋賀県大津市の図書館に所蔵されているとの答え。一説にはテレビドラマの数が6千本というから、それがどのように配架されているのか見てみたいものだ。

### 開館から民間委託までのあゆみ

#### 11 月上方演芸資料館開館

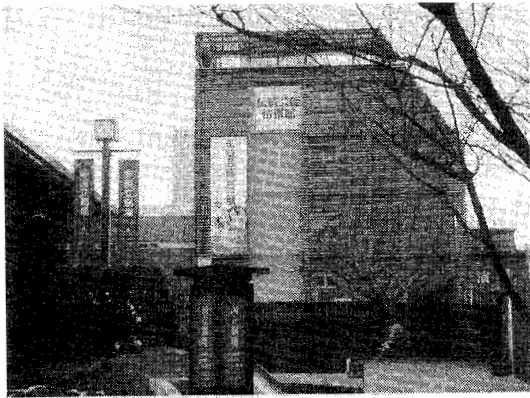
平成9年（1997年）2月入館者10万人達成  
平成16年（2004年）2月現在 寄贈者825名・収蔵資料43,170点

06年、同館は大阪府から民間委託されることになった。学芸員・司書資格を持つ指定管理者制度のもとに新たに歩むことになるそうである。

## 伝統芸能情報館

演芸作家の神津友好さんにお話をうかがった際、国立演芸場の裏にライブラリーができ、台本の収蔵も行っているようだとの情報を得て早速たずねたのだが、その数の少なさに驚いた。

地下に閉架式書庫があり、一般の入室は禁止。書庫入り口鉄扉には「窒素ガス処理の注意事項」が掲示。防火設備の充実振りがうかがわれる。書棚は20~30。電動式で演芸に関する書籍・資料を収蔵。



### 作家と演者——1対1の濃密な関係

左端の棚のひとつに保管された台本は、全てを見たわけではないが演者の自筆台本が大半と思われる。作家の寄贈より演者の遺族の寄贈によるものを収蔵していることからそのように想像される。ガリ版のものもあったが、すべて中性紙のA4版封筒に入れられ、表紙を付けバーコードで分類。

柳家金語楼『酒の友』の手書き台本・新作落語を見せていただいたが、作家のホンを演者が自ら書き写した台本には作家と演者の1対1の濃密な関係がうかがわれて興味深かった。ドラマの脚本・台本のように大勢のスタッフに配る必要性がないからであろう。他の台本についても、演者の遺族等から手

書きの原稿を寄付される場合がほとんどで積極的に台本収集はしていないという。冊数は概算約400冊。寄贈元はデータ検索は不可（内部資料はあると思われる）。

貴重な資料としては、エノケンの戦時下の検閲台本（座付き作家・菊谷栄の作）も保存。

閲覧方法は手書きの図書カード or データ検索で図書を請求し、閉架式書庫から出してもらう。職員は5名ほどか？ 閲覧&コピー可能。データ検索はカード式より便利。キーボード検索ではなく、画面で字をタッチする方式。（ATM方式）著者名、演者名、著作を入れればOK。

ちなみに神津作品は台本10冊ほどが閲覧可能（三球照代の遺族よりの寄贈か？）。

### 伝統芸能情報館の概要

今後、われわれアーカイブの開館設立の参考までに「伝統芸能情報館」の概要についてパンフレットをもとに抄録しておく。

『同館は「文化デジタルライブラリー」の発信基地である。これは、政府が推進する「教育の情報化プロジェクト」の一環として構想され、より身近に優れた舞台芸術に触れる機会を提供することを目的に整備を進めてきた。デジタル技術を活用し集積、保存される舞台芸術情報は、教育用コンテンツとして、学校等の教育機関並びに一般に広くインターネット配信するとともに「伝統芸能情報館」で公開していく。

伝統芸能をより身近に「聴く・見る・触る」というコンセプトのもとに各種コンテンツの製作を行い、デジタル情報に直接触れるデジタル展示とともに、併せて従来通りの博物館展示も行う。開架式を備えた図書館施設。さまざまな映像・音響機器を有するレクチャー室を多角的に活用し、伝統芸能の啓蒙、普及に資する活動。』（パンフレットより）

（津川 泉、調査協力・石橋映里）

## 【日本テレビ放送網(株)取材】

昭和 27 年 (1952 年) 10 月 15 日 創立。

昭和 28 年 (1953 年) 8 月 23 日 放送開始。

### ①情報ライブラリー部での台本保存

日本テレビ放送網(株)情報ライブラリー部には放送開始当初からの映像が保管されている。ところが、台本に関しては保存管理するシステムはなく、将来的にも保存する予定はないという。

ライブラリー部の管轄として現在保存している台本は、スタッフから委託された物のみ。生田スタジオの倉庫に、段ボール約 30 箱分が保管されていた。中身は当時の担当者以外は不知。箱に記載されたメモ書きのリストからは、『とびだせバッチリ』や『夕焼け番長』など昭和 40 年代放送のアニメやドラマ題名もあり、古い台本がランダムに保管されている状況と思われる。保管委託したスタッフはすでに退職し、今後は保管台本が破棄される可能性もあり、早急な対応が必要と思われる。

民放キー局の 5 社では、半年に一度の割合でライブラリー部門の会議が開かれる。その場でも台本収集について話題になったが保存の必要は意識しつつ、他局でも手つかずの状況だという。

### ②各制作部での現状

ドラマ脚本については、大量の台本がドラマ制作部に保管されている事を確認した。基本は一話一冊単位で保管し、新しいものについては数冊ずつ保管。数話を一冊に合本する方式で保管している場合もある。保管リストについては、現状は未整理で、何冊保存されているかは不明。保管台本は、真っ新な物が基本である。監督がカメラ位置などを書き込んだ「カット割り台本」の方が文化資料としては貴重であるが、書き込み台本は各スタッフに処理は任されている。

さらに、ワイドショーの構成台本について

も、一冊ずつ保管されている事がわかった。ただし、この台本はスタッフのための進行表であり、読み物としての活用方法は少ない。番組の性質上、過去の放送 VTR を探す必要があり、数年前から台本の表紙部分を検索できるようにデータ入力しているようだ。

No.	Title	Date	Time
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...
11	...	...	...
12	...	...	...
13	...	...	...
14	...	...	...
15	...	...	...
16	...	...	...
17	...	...	...
18	...	...	...
19	...	...	...
20	...	...	...
21	...	...	...
22	...	...	...
23	...	...	...
24	...	...	...
25	...	...	...
26	...	...	...
27	...	...	...
28	...	...	...
29	...	...	...
30	...	...	...
31	...	...	...
32	...	...	...
33	...	...	...
34	...	...	...
35	...	...	...
36	...	...	...
37	...	...	...
38	...	...	...
39	...	...	...
40	...	...	...
41	...	...	...
42	...	...	...
43	...	...	...
44	...	...	...
45	...	...	...
46	...	...	...
47	...	...	...
48	...	...	...
49	...	...	...
50	...	...	...

### ③台本の処分方法

台本は印刷部数が少なく手に入れることが非常に困難であるため、高値でオークションに出されたり、古本屋に売られる現状がある。ドラマ部ではこのような弊害防止の目的として、数年前から台本の中裏表紙にナンバリングし、管理している。その記録番号から、外部スタッフが台本をオークションに出展した事実を突き止めた実績もある。

不要台本などの廃棄に関して、日本テレビでは著作権保護や個人情報保護のため“まもる君”という専用有料引き取りボックスを活用し、不正流出を防止しているという。

### ④まとめ

以上、民放においては過去の台本を整理して保存するシステムが置かれていないのが現状のようだ。テレビ制作者の過去の意識として、『テレビ文化は放送されたら消えていく物』とされ、台本も消耗品という概念が強く、この点で映画とは意識が多少異なるのだろう。

今後は、各局担当者のネットワークを通し、散逸しつつある台本を収集保存する方法が有効と思われる。(石橋映里)

## 【作家訪問】

こしづ ともよし  
神津 友好

大正 14 年（1925 年）長野県生 演芸脚本家

東京都世田谷区弦巻在住。

テレビ『花王名人劇場（フジ）』、ラジオ『小沢昭一の小沢昭一的一ところ 10 周年スペシャル・元祖蒲田行進曲（TBS・民間放送連盟賞娯楽番組最優秀賞）、著書『笑伝林家三平』（文芸春秋・新潮文庫）、テレビ番組出演など多数。

演芸台本は上演のたびに世相などの新しい話題を入れるため手直しを行うので、現役の間は常に手元に置く必要がある。原稿は手書きのことが多く、劣化がひどく、自分の手で補強している。漫才の台本は一応登録のシステムがあるが、ほとんど活用されていないのが現状である。

現在自宅にある台本はおよそ数百冊。その多くは 3 階の書斎・書庫兼用の部屋に所蔵してある。台本は各放送局開局当時放送された貴重なものが多く、テレビ台本のほかにラジオ用放送台本、番組進行表、その他の資料、写真なども保管してある。

この台本、資料、蔵書を今後どうするかについては現在考慮中である。

三木睦郎氏は「演芸番組は会議でのネタ出しが中心なので、演芸台本は一回のみの消耗品と考えている」そのため、台本の保存は特に積極的にはしていないという。

柳家金語楼氏（故人）の自作落語台本その他の資料は、現在、ご子息の山下武氏が管理している。

小島貞二氏（故人）の著作物は、ご子息の小島豊美さんが自宅で管理しているが、今後の処分方法については未定。





## 作家の遺族訪問

岡本 克己 (故人)

昭和5年(1930年) 鳥取県生 ドラマ脚本家

平成14年(2002年) 死去。

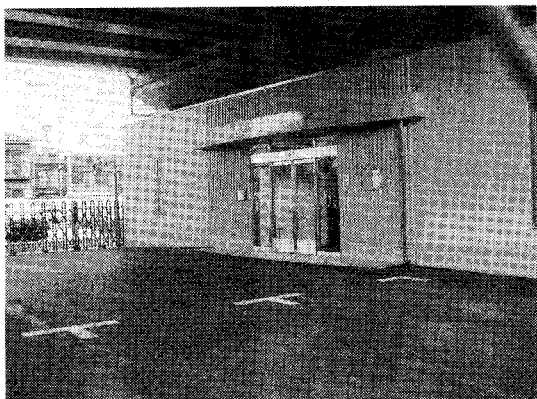
東京都練馬区中村の自宅に遺族在住。

日本脚本家連盟 前理事長

テレビ『火曜サスペンス・地方記者立花陽介シリーズ』(日本テレビ)、『土曜ワイド・終着駅シリーズ』等の2時間ドラマ脚本多数。『走れ玩具』(芸術祭優秀賞、プラハ国際テレビ祭賞)、著書『現代テレビドラマ作劇法』(映入社)、『岡本克己放送作品自選集』(三笠書房)。

昭和29年(1954年)ニッポン放送開局の際、専属ライターとなり、数多くのラジオドラマ脚本を執筆。昭和40年(1965年)『駅』でNHK年間テレビドラマ脚本賞を受賞。以後テレビドラマに専念。

晩年、故人は病気入院の際、自選の二時間サスペンスドラマの台本数十冊を専門業者に託して数冊分ずつをまとめて製本。現在、このハードカバーの合本にした作品が十数冊、遺族により自宅に保存されている。それ以外の台本(ダンボール10個分)は、自宅近くの西武池袋線・中村橋駅高架線下の倉庫に、遺品の家具・写真アルバムなどと共に、月額約1万円で保管を依頼してある。



さらに残された台本多数が自宅書庫などの各所に山積しているが、その処置についてはまったく見通しは立っていない。

故人は民放初期の頃、ドラマ以外のラジオ番組も多数執筆。さらにテレビでも料理番組『ごちそうさま』(日本テレビ)など、各方面の番組を幅広く手掛けていたが、それらの貴重な台本は現在一冊も残っていない。

今後、これらの台本については、脚本アーカイブが発足した場合には寄贈の意思はあるが、遺族間での最終的な合意はまだ出ていない。

## 受け皿の必要性

横光 晃 (故人)

昭和5年(1930年)北海道札幌市生 ドラマ脚本家 日本放送作家協会 元常務理事。

平成10年(1998年) 紫綬褒章受賞。

平成13年(2001年) 死去。

東京都港区三田の自宅に遺族在住。

ラジオドラマ『アドルフに告ぐ』(TBS・ギャラクシー大賞、芸術祭作品賞)『遙かなるズリ山』(TBS・芸術選奨文部大臣賞、芸術作品賞)、テレビドラマ『オランダおいね』(TBS)ほか多数。

NHK 札幌中央放送局専属ライターを経て上京。ラジオドラマ、テレビドラマの脚本を数多く執筆した。

残された多数の放送台本は遺族により整理されたが、ダンボール箱三十数個に及び、自宅保存が困難ということで、日本放送作家協会事務局に送られて来た。協会事務局ではその処置に窮し、遺族と相談の上、常務理事の水原明人が仲介の労をとり、東京・麴町の放送番組センターを紹介し、同センターの横浜ライブラリーがこれを引き取った。

横浜関内にある同ライブラリーは、従来テレビドラマ、テレビドキュメンタリーなどの各種受賞作品などを中心に映像資料を保存、展示し、来館者の希望に応じて館内でこれを視聴させているところで、放送台本については話題作以外はあまり保存されていない。今後、同様のケースがあった場合、果して今回のように保存を引き受けるかどうかは疑問である。

国際テレビ祭、芸術祭など生前受賞作品の多かった横光氏の遺作で、しかもドラマ作品が中心だったからという特殊な例と考えた方が良いと思う。遺族の台本保存については、今後の課題として検討する必要があると思われる。

くぼた あつんど  
窪田 篤人 (故人)

昭和4年(1929年)東京生。

平成10年(1998年)静岡県熱海市の自宅で死去。

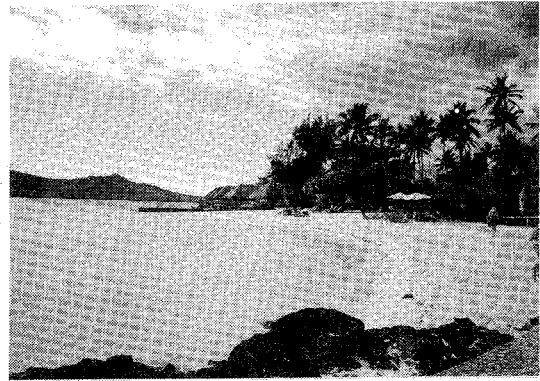
遺族なし。

昭和23年(1948年)、新宿・ムーランルージュ文芸部に入り、19歳で処女戯曲上演。ムーランルージュ解散後、ラジオ、テレビ、映画、舞台などの脚本を数多く執筆。テレビ草創期から活躍し、『七人の孫』『マリーの桜』(TBS)『太郎の青春』(NHK)『幌馬車は行く』(日活映画)『草原の恋歌』(明治座上演)、著書『新宿ムーランルージュ』(六興出版)など、数千本にのぼる大量のドラマ脚本、著作を残した。

晩年、独り暮らしだったため、熱海・来宮のマンションで喘息発作で急死した際も看病する者がなく、死後、遺体で発見された。

残された遺産、その他は九州に住む遠縁の親族が相続し、遺品の仕事机、書棚、蔵書、ビデオ作品などの一部は、友人、弟子などの希望者に引き取られ、遺骨は生前の故人の遺

言に従って翌年、南方の海に散骨された。



貴重なテレビ台本のすべては、後日、遺産のマンションが売却された際に、作家仲間、弟子などに一言の相談もなく業者によって処分されたようで、現在、一冊も残されることなく、住居もなくなったため、その痕跡もない(僅かに残されたのは、死の翌年の春に開かれた『窪田篤人を忍ぶ会』の時、来会者に配られた遺稿集『海へ……』に載せられた何編かのエッセイと戯曲、テレビドラマの作品リストだけである。

(水原明人、調査協力・石橋映里)

## 古本屋・ネットオークション

### 台本が売られている！

いつの頃からか、演劇・映画の専門古書店の間で放送脚本・台本が価格をつけられて売られるようになった。都内の古書店の集まる神保町のある店では映画パンフなどと一緒に脚本・台本が7段の棚5列にアイウエオ順に配架されている。この店では映画パンフ1万点をうたい文句にしている。

花王愛の劇場—— 500円

月曜ミステリー—— 500円

大河ドラマ—— 千円

水戸黄門—— 千円

がしんたれ—— 千円

中には準備稿、改訂稿、なども混じっている。これには驚いた。スタッフか演者が持ち込んだものか。あるいは廃棄したものがタテバ（紙ごみ集積場）で業者に拾われ値がついたものか。

東銀座にある演劇専門古書店では100冊ほどの脚本・台本が平積みになっていた。一律300円均一。早坂暁のものなどが混じっていた。これは持ち込んだ人の名前が記載されていた。売ったものか、廃棄したものかは定かではない。

### ネットオークションの怪

古書店での台本の商品化に驚いていたなら、ネットオークションではもっとすごいことになっていた。ここでは台本が万単位で取引されていたのである。

平成17年（2005年）11月から平成18年（2006年）1月末までウォッチングした結果、めぼしいものを拾ってみよう。

三谷幸喜大河ドラマ 新撰組—— 1万5

千円～5万1千円（最終回）

俺たちは天使だ2冊セット—— 6万7千円

大河ドラマ 義経—— 1万百円

1リットルの涙—— 2万5千円

三谷幸喜 古畑任三郎ラスト・ダンス—— 8万3百円

野ブタ。をプロデュース—— 3万2千円

オークション検索結果

脚本で出品中

- ホームシアター
- エポックスタンド
- たなこ書店
- エンタケイト
- フロッピーディスクアルバム
- その他

(表示はランダムです)

1,800円/1人17/毎日	1,000円/1人17/毎日	9,500円
台本19-20/早坂暁/早坂暁/早坂暁	台本19/早坂暁/早坂暁/早坂暁	仮面ライダー
早坂暁	水谷豊	木

仮面ライダー-變身台本第31話 カセット	6,500円
仮面ライダー-變身台本第32話 カセット	8,000円
仮面ライダー-變身台本第33話 カセット	8,000円
FFVIIアドベントチルドレン 台本キーホルダーキャップセット	4,000円
台本「フェイス18巻/仲間由紀恵高橋克典山口祐一郎集録」	18,000円
三谷幸喜-脚本台本【HR】18巻/榎原夏子中村麗登	50,000円
台本「パーフェクトラブ110巻/福山雅治木村佳乃板谷由夏	10,000円
x122 スカイハイ台本 釈由美子 サイン	6,000円

ネットオークションの実地調査を行った高梨安英の分析を抄録する。

「ジャニーズ系や、人気アニメ声優が出演した台本が、比較的高値で取引されている。台本が、アイドル関連グッズ化している。台本が、中身の価値ではなく、アニメのセル画や、宣伝用ポスター、衣装、小道具類と同一視され、放送関連グッズとして扱われている。とくに特撮・アニメ作品において、その傾向が顕著。売買をする人々のマニア度が高い為、1冊数万円という異常なほどの高値で取引されている例が少なくない。作家の側は、台本は、中身こそが全てと考えがちで、脚本アーカイブズが博物館的役割も担う場合、放送関連物件（グッズ）としての価値も、積極的に取り込むべきであり、中身こそが全てではなく、パッケージの重要性についても注目しなければならないのではないか。

（津川 泉、調査協力・高梨安英、横山 徹）

## テレビ脚本・台本総数 234 万 4106 冊（推定）新聞縮刷版のラ・テ欄（ラジオ・テレビ欄）の検証と、その意義について

実態調査部、ラ・テ欄抽出班は、ラジオ放送開始から 80 年間におよぶ放送脚本・台本の総数の割り出しと、詳細な書誌情報を作製する為の資料として、大正 14 年(1925 年)の放送開始日から現在まで、どのような内容の番組が存在したか、その数を集計してまとめるという膨大な作業に取り組んだ。

だが、準備室の開設から報告書の提出まで四ヶ月ほどの期間しかなく、人員もボランティアを含むわずか五名で、そのうち三名は現役の放送作家である為、過去の全放送を検証する事は不可能であり、本年度は、昭和 28 年(1953 年)に放送を開始したテレビ番組の抜き取り調査のみに絞る事を決め、ラジオおよび地方局に関しては翌年度より実施する事とした。

サンプリングの方法としては、まず検証する資料を、放送開始以来、番組案内欄が他紙よりも充実していた「朝日新聞・縮刷版」と定め、番組改編等の変動が少ない三月期の第一週目の平日・土曜・日曜のテレビ欄ページを複写し、昭和 28 年～平成 9 年(1953 年～1997 年)までを詳細にチェックし、分類・集計を行った。

その結果、テレビ放送開始から平成 9 年(1997 年)までに「196 万 2074 冊」もの脚本・台本がテレビ放送で使用されている事が計算上明らかになり、同様な手法で、平成 10 年(1998 年)以降を加算すると、現在までに「234 万 4106 冊」以上にも及ぶ脚本・台本が存在する事が判明した。(詳細については、P. 26 参照)

この検証作業によって、これまで伝えられ

てきた放送史を見直さなければならないような新たな発見もいくつかあり、それに関しては、次頁よりの年代別の調査報告で、いくつかご紹介しようと思う。

### より現代的な視点に立った「日本放送史」の見直しの必要性

今回の作業によって実感した事だが、日本脚本アーカイブズは放送史における名作や、有名作家、人気番組の脚本・台本を集めるのはもちろんだが、これまでその存在すら意識されていなかったような番組の脚本・台本を収集・保存する事にも大きな意義がある。

過去に出版されたテレビ放送史は、時代的な背景もあり、ニュース報道や、告発型ドキュメンタリー、あるいは社会派ドラマといった番組に記述が偏りがちで、庶民的な娯楽番組や子供向け番組の文芸的な価値、あるいは、庶民生活や庶民願望を映し出す鏡としての役割について、あまりにも記述が手薄であったように思える。

日本脚本アーカイブズは、過去から未来における放送文化の礎となるような事業である以上、再度、テレビ放送史そのものを、より現代的視点で検証し直し、21 世紀という新しい時代にふさわしい放送文化史をあらためて編纂し直す作業も必要となってくるはずである。

その為にも、ラ・テ欄の検証は、地道な作業ではあるが、本年度以上に、丹念に精密に行われる必要があるというのが、我々スタッフの共通する思いでもある。(高梨安英)

## 視聴世帯は 866 件、テレビ本放送始まる

[昭和28年(1953年)~昭和34年(1959年)]

昭和 28 年 (1953 年) 2 月 1 日、NHK がテレビの本放送を開始した。専用のテレビスタジオはまだ一つしかなく、またカメラもスタジオ用三台、中継用二台を保有しているだけで、本放送開始当日の受信契約数は、わずか 866 件。うち都内の契約は 664 件。そのうち 482 件がアマチュアによる自作の受像機で、放送時間も、昼と夜の 5 時間程度だった。

本報告書 3 ページに載せた放送開始当日の新聞の「ラ・テ欄」を見ると、テレビ案内欄は、どこにあるか分からないほど小さい。ラジオ欄の左下に「NHK テレビ」と僅かなスペースが当てられているだけで、テレビ放送開始の特集記事さえ無い、静かな幕開けであった。

### テレビ草創期、NHKは娯楽番組の宝庫だった！

この日、いわゆるゴールデンタイムに放送された目玉番組は「今週の明星」という”紅白歌合戦”の母体となったラジオの人気歌謡番組であり、その公開放送に相乗りする形で、同時刻にテレビが生中継をしている。同様に、その翌日のゴールデンタイムには、「二十の扉」という、やはりラジオの人気番組の生中継を行っているが、この番組もいわゆる娯楽バラエティーであり、当時のNHKが、必ずしも、”報道と情報”を重視した、お固いイメージではなかった事が分かり、非常に興味深い。

この事実は、縮刷版を集計した総数にもハッキリとあらわれていて、放送開始年の昭和 28 年 (1953 年) から 29 年 (1954 年) までに制作された 2 年間の番組数を算出すると、

○娯楽・バラエティ	3528 件
○ドキュメンタリー・情報	2432 件

○ドラマ

486 件

このように、圧倒的に「娯楽・バラエティ」の数が、他のジャンルよりも上回っているのである。

実は、昭和 36 年 (1961 年) 3 月 6 日の朝日新聞紙上で、テレビ草創期のNHKの番組予算の詳細が公表されるのだが、テレビ放送網を拡充するための設備投資に莫大な費用がかかった為、番組制作費は、総予算のわずか 9%を下回る額だったという。

こうした低予算で、受像機の普及を急いだため、おのずと一般庶民にウケの良い、歌謡番組や演芸、寄席、クイズといった娯楽・バラエティに依存した番組作りが行われていた事が容易に想像できる。

極めて予算が少ない中で、万人にウケる娯楽番組を生み出そうとした場合、最も必要なのは、卓抜した才能やアイデアを持った脚本・台本作家である。このテレビの草創期を支えた、永六輔、青島幸男、藤本義一、野坂昭如、前田武彦、井上ひさしといった放送作家が、後にマルチタレントや小説家として活躍している事を思えば、当時の放送が、いかに作家の才能に頼っていたかが十分にご理解いただけると思う。

残念ながら、この時期の映像は、極一部を除いて一切残っていないが、脚本・台本ならば、作家本人や関係者を通じ、搜索や収集が可能である。当時の放送内容を後世に遺すためにも、この時期の脚本・台本は、積極的に搜索する事が急務となっている。(高梨安英)

### 放送史ヘッドライン

- ①NHKテレビ本放送開始(S28)
- ②日本テレビ開局~街頭テレビ人気(S28)
- ③KRテレビ(現・TBS)開局(S30)
- ④東京タワーの完成~民放四局体制へ(S33)
- ⑤皇太子ご成婚による受像機の普及(S34)

## 一億総白痴化からはじまった、 テレビジョンの普及

[昭和35年(1960年)~昭和44年(1969年)]

1960年代の初め、テレビを評し、よく「一億総白痴化」という事が叫ばれ流行語となったが、新聞のテレビ欄の記述によると、この言葉はテレビを総評したものではなく、日本テレビが開局と同時にスタートさせた「何でもやりますョウ」というバラエティ番組を批判した文章である事が判明した。後の「どっきりカメラ」に通じるお騒がせ企画に対し、昭和32年(1957年)に評論家の大宅壮一氏が「テレビという最も進歩したマスコミ機関によって、一億白痴化運動が展開されている」と記したのだが、その言葉が一人歩きして、あたかも、テレビそのものが白痴化を促進するメディアであるかのように報じられてしまったのである。

だが、ここで注目していただきたいのは、大宅壮一氏の番組批判ではない。テレビ放送は、放送開始からわずか四年で「最も進歩したマスコミ機関」として知識層に認識されるに至ったのである。実際、当時の皇太子(現・明仁天皇)御成婚をきっかけに、テレビの契約件数は100万人を越え、昭和36年(1961年)4月には、朝日新聞紙上において、これまでラジオ欄が上で、テレビ欄が下だった記事の配置が逆転する。(次ページ参照)

### 「ラ・テ欄」が逆転した頃のテレビ番組

ちょうどこの時期、日本テレビ、KRテレビ(現・TBS)、フジテレビ、日本教育テレビ(現・テレビ朝日)そして、NHK教育テレビが新たに開局し、テレビ放送は合計6チャンネルに増え、番組の数も一日に101件に膨れ上がっている。

ラテ欄が逆転した昭和36年(1961年)の

年間番組数の内訳を算出すると・・・

○ドラマ	9976件
○アニメ・人形劇	1073件
○ドキュメンタリー/情報	18980件
○娯楽・バラエティー	7908件

教育テレビが二局誕生した事により、草創期の中心的存在だった娯楽バラエティーの割合が減り、ドキュメンタリー・情報番組の数が圧倒的に増え、同時に、ドラマの数が急速に増加する。

「花の生涯」にはじまる大河ドラマや、「おはなはん」に代表される朝の連続テレビ小説、あるいは「七人の刑事」「三匹の侍」「判決」といった局制作のドラマが増えたのも一因だが、「スーパーマン」「ベン・ケーシー」「逃亡者」といった海外のフィルムドラマが大量に輸入された事により、これまで、テレビを一段見下した形で参入を怠っていた日本の映画会社が、テレビ部やテレビ室を設け「特別機動捜査隊」「ザ・ガードマン」「青春とはなんだ」等のドラマ制作をはじめめる。

また、昭和38年(1963年)、国産初の連続テレビアニメ「鉄腕アトム」がスタートしたのを皮切りに「鉄人28号」「エイトマン」等の国産アニメが続出し、第一次アニメブームと呼べるほどの量産体制に入っていく。

こうしたドラマ・アニメ分野において、脚本は番組制作を行う上での「要」であり「生命」でもあり、これまで光の当たらなかった脚本・台本の重要性が、ようやく問われる時代が到来したのである。(高梨安英)

#### 放送史ヘッドライン

- ①国産連続動画「鉄腕アトム」開始(S38)
- ②初の衛星中継〜ケネディー暗殺(S38)
- ③東京五輪開催〜TVの普及が加速(S39)
- ④「ウルトラQ」開始・怪獣ブームに(S41)
- ⑤アポロ11号報道〜カラー化進む(S44)





## カラー時代への移行と 加速するテレビの総合メディア化 [昭和45年(1970年)~昭和54年(1979年)]

70年代は、昭和45年(1970年)に起きた三島由紀夫割腹事件の中継を皮切りに、大事件やスクープを臨場感たっぷりに報道するという、テレビ本来の魅力(速報性・即時性)が大きくクローズアップされた年代でもあった。以降、テレビは圧倒的な力で、あらゆるメディア・報道ジャーナリズムの中において、実質的に中央の座に収まっていくことになる。

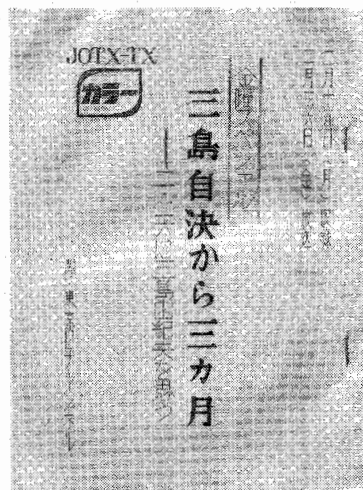
昭和47年(1972年)に起きたあさま山荘事件の際には、NHK、民放とも10日間に渡り、現場からの連続生中継を行った(犯人逮捕連行前後には88.7%の視聴率を記録)。このことがテレビの制作者側および視聴者側の双方に投げかけたショックは大きく、これを契機に番組も大きく変容していく。

日本のテレビ普及率はアメリカについて世界第2位となり、昭和47年(1972年)にはカラーテレビの受信契約数が白黒テレビの契約数を上回り、本格的なカラーテレビ時代が到来する。番組の放送量総数は年間10万本を越え、教育番組から深夜の成人向け番組まで、多彩かつバラエティに富んだジャンルの番組が早朝から深夜の時間帯まで氾濫するようになる。

### お茶の間のお楽しみ箱から 社会を動かすメディアへと変貌

報道番組がワイドショー化し、続々とその数を増やしていく中で、実験的、革新的な番組も多く制作され、司会者とのトークや歌を交えたボウリング番組など、音楽やスポーツといった多くの要素を斬新に融合させた娯楽・バラエティ番組も花盛りとなった。人気番組「8時だヨ!全員集合」は最高視聴率50.5%を記録し、昭和54年(1979年)にはゴールデンタイムだけで23本という史上空前の

クイズ番組ブームも起こった。ドラマの世界では「ありがとう」「時間ですよ」「細うで繁盛記」「寺内貫太郎一家」「白い巨塔」などの大ヒット作をはじめとして、「奥さまは18歳」「ハレンチ学園」「美しきチャレンジャー」などの視聴者層を絞ったユニークな作品も多く現れ、人気を集めた。また「太陽にほえろ!」「3年B組金八先生」などの長期に渡って人気を博したシリーズが開始された。バラエティ番組としては初の1時間30分枠を取った「巨泉・前武ゲバゲバ90分!」や2時間、3時間ドラマ、「24時間テレビ」といった長時間の番組も増えていった。



娯楽番組だけでなく、あらゆる情報・報道を一手に引き受け、お茶の間で手軽に享受できる総合メディアとして、広く大衆の支持を得たテレビはその後、社会現象や風俗、一大イベントを創出し続け、社会を変えるほどの影響力を持つ巨大なメディアへと加速度的に発展していく。(馬場 絵麻)

#### 放送史ヘッドライン

- ①TBS・ABC、新聞系列にネット再編(S49)
- ②石油危機により深夜番組自粛(S49)
- ③ロッキード事件の視聴率が平常の6倍に(S51)
- ④外人スターが大挙来日、CM出演(S51)
- ⑤「紅白歌合戦」視聴率70%を越える(S52)



## 昭和から平成へ さらなる変革期へ突入

[昭和55年(1980年)~昭和64年(1989年)]

80年代は、70年代に引き続き、より様々なジャンルの番組が、直接世の中の流行の発信源として注目された年代でもあった。

テレビは昭和58年(1983年)に誕生後30年を迎え、新たな変革期に突入。「そこが知りたい」「なるほどザ・ワールド」「ウルトラアイ」、旅案内・紀行番組など、情報色の強い娯楽番組も多数生まれた。音楽番組も好調で、「夜のヒットスタジオ」「紅白歌のベストテン」「ザ・ベストテン」などの生放送番組が軒並み高視聴率を稼ぎ、各局で「音楽祭」番組が放送された。

### “素人参加”番組から

### “素人主導”番組へ

バラエティ番組では政治・世相を風刺するといった内容のコントは見あたらなくなり、「笑っていいとも!」「オレたちひょうきん族」などが人気を集め、空前の漫才ブームが起こる。一方「夕焼けニャンニャン」など、素人をメディアの力でスターにしてしまう、という形式の番組も流行。その女子大生版である「オールナイトフジ」も他の深夜向けの番組とともに注目を浴びる。しかしどの番組も内容がエスカレートし、あまりに過激すぎるといって当時の国会でも議論となり、ついに自粛の憂き目にあうことになる。

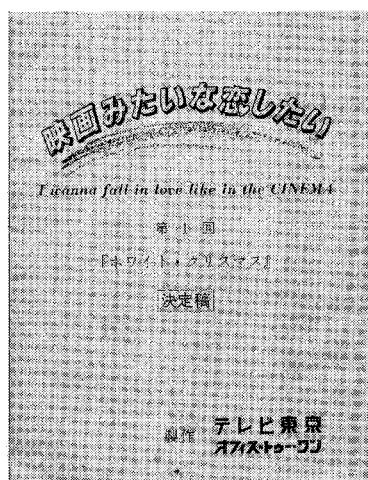
楽屋裏を全部見せます、という内容の番組のブームと相まって、テレビに出る芸能人・芸能界はもはや憧れの対象ではなく、隣人や就職口の一つというイメージも一般に定着する。

ドラマは「北の国から」「おしん」「金曜日の妻たちへ」「ふぞろいの林檎たち」「スチュワーデス物語」「積木くずし」「スケバン刑事」などがあるが、中でも「男女七人夏物語」に代表される、人気俳優や流行の場所、

物などを取り入れ、恋愛を主軸としたストーリーの“トレンドドラマ”が大流行した。

### テレビの大画面化と高画質化

70年代には50万円前後という価格で一般には高嶺の花だったビデオデッキも一気に普及し、大画面テレビとともにホームシアター感覚でテレビやビデオソフトを楽しむというAV指向も強まってくる。ソフトの多角化もあり、地上波だけが独占していたテレビは、次第にレンタルビデオ、ゲームなど他のコンテンツからの影響を受けることになる。



80年代は、昭和から平成に年号が変わった年代でもある。昭和63年(1988年)の天皇陛下大量下血以来、NHKは昭和64年(1989年)1月7日まで連続111日間の連日終夜放送態勢を取った。一方、民放は1月7日の朝から丸2日間のあいだCMゼロ放送を実施するなど、日本の放送史上において空前絶後の態勢が敷かれる中、“昭和”の時代は終了し、新しい年号“平成”を迎えることになった。

(馬場 絵麻)

### 放送史ヘッドライン

- ①NHK衛星放送スタート(S59)
- ②深夜番組が国会で問題になり自粛(S60)
- ③やらせリンチ事件で「アフタヌーンショー」終了(S60)
- ④年末時代劇をきっかけに時代劇ブーム到来(S63)
- ⑤天皇ご逝去全局報道特別編成(S64)

# “Gコード”と“時間またぎ番組”出現

[平成2年(1990年)~平成9年(1997年)]

## バブル期 平成2年(1990年)

80年後半から続くバブル経済期。オヤジギャルが流行語となり、トレンドドラマは全盛期を迎えた。業界にとって制作費大幅増の夢の時代。特番や海外ロケが多いと語り継がれるが、ラ・テ欄からの推測は難しい。

また90年は、長寿番組の終了も多かった。  
(夜のヒットスタジオ、兼高かおる世界の旅、花王名人劇場、11PM)

## バブル崩壊 平成3年(1991年)

湾岸戦争の報道特番が急増。経済はバブル崩壊を迎える。ラ・テ欄から危機感を感じられない。バブルの象徴だったトレンドドラマはその後も衰退せず、呼び名は変わり現存。

## Gコードの出現 平成4年(1992年)

Gコードとは、新聞のラ・テ欄に記載される最大8桁の数字で、ビデオを録画予約の際に必要なデータが入力できるシステム。日本では92年に朝日新聞で初めて掲載された。

187	00	教育セミナー「世界くらしの異国」(イスラム)	00	00	00	年末時代劇スペシャル「おんな小次郎御前」
188	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
189	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
190	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
191	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
192	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
193	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
194	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
195	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
196	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
197	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
198	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
199	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」
200	00	「おんな小次郎御前」	00	00	00	「おんな小次郎御前」

## ワイドショー戦争

平成6~7年(1994~1995年)

昼のワイドショーが2時間に拡大。午後2時枠では、NHKとテレビ東京以外の全局でワイドショーを放送しスクープ合戦が激化。やがて“TBSビデオ問題”(放送前のVTRをオウム真理教幹部に見せた結果、坂本弁護士一家殺害事件

に発展したとされる問題)により、TBSがワイドショーからの撤退を宣言し、事態は終息。

瞬間視聴率競争は、TVリモコンが普及し、視聴者がチャンネルを頻繁に変える“ザッピング”行動を示すようになり激化したと言われている。『ザ・ワイド』(NTV)では、放送開始時間を数分繰り上げ、ザッピングを防止する手法“時間またぎ番組”が採用された。

また、この2年間でドラマ数が前年の3分の2に激減したのは興味深い。虚構のドラマより、事件に視聴者の関心が集まったようだ。  
**時間またぎ番組確立 平成8年(1996年)**

『マジカル頭脳パワー』(NTV)が土曜から木曜19:54に変更され、“時間またぎ番組”方式が確立。“援助交際”“ルーズソックス”が流行語に選ばれ、視聴者の第一ターゲットであるF1層(20~34歳女性)が、女子高生まで引き下げられたと言われる。ラ・テ欄上でも、若者向けバラエティ番組が増加した。

## まとめ

90年代後半から携帯電話とインターネットの普及により、テレビ離れが進むが番組数に大きな変化は見られなかった。

バブル期以降の番組の変化は、深夜のミニバラエティ番組と通販番組の増加である。さらに映画放映も減少しているが、これはレンタルビデオの普及が原因と思われる。

また、デジタル化に伴う番組数の増加で、台本数も急増するが、経費削減から印刷製本しないものが増加。今後は残る台本と消えていく台本の格差が大きくなるのでは、というのが私見である。(石橋映里)

### 放送ヘッドライン

- ①時間またぎ番組出現 (H6)
- ②Gコード表記 (H6)
- ③長寿番組が続々終了 (H6)
- ④CSデジタル放送開始 (H6)
- ⑤昼ワイド戦争 (H6)

## 平成 17 年度 (2005 年度)

# 脚本・台本総数 第一次集計のまとめ

### 【年代別、テレビ脚本・台本推計総数】

※定時ニュース、映画、舞台中継等、放送脚本・台本の存在しない番組は除く。

○昭和 28 年～昭和 34 年 (1950 年代)	64,589 冊
○昭和 35 年～昭和 44 年 (1960 年代)	486,535 冊
○昭和 45 年～昭和 54 年 (1970 年代)	514,037 冊
○昭和 55 年～昭和 64 年 (1980 年代)	492,259 冊
○平成 2 年～平成 9 年 (1990 年代)	404,654 冊
(在京キー局のみ)	

昭和 28 年～平成 9 年までのテレビ脚本・台本の総数 1,962,074 冊 (推定)

本年度、実態調査部、ラ・テ欄抽出班が行った平成 9 年 (1997 年) までの集計結果は、以上の通りである。1980 年代に 15 分番組や 30 分番組が減少し、情報、バラエティー、ドラマ等、すべての番組がワイド化する傾向にあり、一度、極端に番組数が激減した事がわかる、貴重なデータになっていると思う。

ところで、平成 8 年 (1996 年) 10 月、CS デジタル放送「SKYPerfecTV！」が開局し、平成 12 年 (2000 年) には、BS デジタル放送、その 2 年後には、110 度 CS デジタル放送がはじまり、TV 放送は 100 チャンネルを越える多チャンネル化の時代を迎えた。

新聞の限られた紙面では、収まりきれないほどチャンネル数が増加したため、新聞縮刷版のラ・テ欄は、事実上、放送番組の正確な

実体を検証できる情報媒体ではなくなってしまった。

だが、この多チャンネル化によって放送台本の数は、膨大な量に膨れ上がり、その内容も、従来のジャンルとは著しく異なる点が多い為、平成 10 年 (1998 年) 以降は、次年度より、新たな資料をもとに検証と集計を継続する予定である。

最後に、本年度の計算方法を用いて平成 10 年 (1998 年) から現在までの在京地上波局の番組数を加算すると、次なる値が導きだせる。

○昭和 28 年～平成 9 年のテレビ脚本・台本の総数	1,962,074 冊
○平成 2 年～平成 11 年 (1990 年代)	519,506 冊
○平成 12 年～平成 15 年 (2000 年代)	382,032 冊

昭和 28 年～現在までのテレビ脚本・台本の総数 2,344,106 冊 (推定)

以上の結果、テレビ放送開始から現在までに、計算上「約 234 万 5000 冊」(推定)の脚本・台本が存在した事を報告するとともに、日本放送作家協会・日本脚本アーカイブズの基準値として用いる事とする。(高梨安英)

# 大衆文化を支える放送作家

## 平成17年度 アンケート部 第一次報告

平成18年(2006年)3月

### はじめに

ラジオ放送が始まって80年、テレビ放送が始まって半世紀、その間ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティー、情報番組など、様々なジャンルで書かれてきた脚本・台本の数は膨大な数に及び、“作品の背骨”として放送文化を支え、時に時代の証言者として、時に世相を映す庶民史として、その役割を果たしてきた。

しかし残念なことに、日本では脚本や台本が貴重な文化遺産であり、作家個人にとっても大切な知的財産であることに、私たち放送作家を含め多くの人が気づかないまま長い歳月が過ぎてしまった。

その結果、これまで生み出された膨大な数の脚本・台本は、散逸し、失われ、放送ライブラリーや記念館などに寄贈された幸運な一部の作品を除いて、このまま行けば消滅する危機に瀕している。

こういった状況の中、私たち日本脚本アーカイブズ特別委員会はこの国の放送文化に禍根を残す事のないよう、脚本や台本をとりまく実態を把握し、放送作家自身がこの厳しい現状をどのように考えているのかを把握するために、昨年12月私たちの団体、社団法人日本放送作家協会の会員1,033名(平成17年12月現在)を対象にアンケートを実施した。

このアンケートで、私たちが最終的な目標とする「日本脚本アーカイブズ会館設立」の際、膨大な数にのぼる脚本・台本をどのように収集し、管理・保存して欲しいのか、また資料としてこれらを体系化するためにどんな方法を望ん

でいるのか、さらに収集した脚本・台本をどのような形で社会に提供し役立てたら良いと考えているのか、彼らの意識を探ってみた。

回答を寄せてくれた会員は231名（回答率約23%）。時間に追われる多忙な仕事の中、アンケートを要請したのが暮れの押し迫った12月であったことを思えば、この回答率は決して低い数字とは言えない。

しかもその回答内容は、一日も早い「日本脚本アーカイブズ会館」の実現を願う熱い思いで満ち溢れていた。

以下がそのアンケート結果のまとめである。

これらのデータが「日本脚本アーカイブズ会館」設立活動に向けての、大きな社会的うねりを生み、設立のための大切な基礎資料の一つとなることを願ってやまない。

## アンケート結果の主なポイント

### ① 大衆文化を支える放送作家

放送作家の仕事は、本業のテレビ、ラジオから始まり舞台、出版と裾野を広げ古典芸能（例えば義太夫）からネット小説といったIT分野まで、多彩かつ多ジャンルに及び、放送作家が日本の大衆文化を支えてきた事がよく分かる。これは見方を変えれば、いかに多くの脚本・台本がそこに存在するかの証でもあろう。（31 ページ）

### ② メディアの変革と共に脚本・台本の数は増大している

放送作家は様々なジャンルにわたって仕事をすると共に、色々なメディアで横断的に仕事をしていることが分かった。このことから、一人の放送作家が創り出し保有する脚本・台本は、時代を追うごとに増加していることも分かった。（35 ページ）

### ③ 脚本・台本は時代の検証資料である

ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティー、情報番組など、番組は多様化、ボーダレス化し、番組の垣根が無くなりつつある。そのため1冊の脚本・台本に様々な情報が詰め込まれるようになった。脚本・台本を検証することで、その時代の在りよう、時代が要求していること、大衆（庶民）文化の変遷、

言葉に見る日本人の意識などが見えてくる。脚本・台本は時代を映す鏡である。(37 ページ)

④ 脚本・台本は重要な「放送文化遺産」である

放送作家の80%が脚本・台本は「庶民史」資料として貴重であると考え、重要な放送文化遺産だと思っている。また、自分の歴史を刻む大切な個人財産だと答えている。(38 ページ)

⑤ 放送作家の80%は自分の脚本・台本を保存している

自分の作品である脚本・台本を、およそ80%の放送作家は大切に保存しており、20%の放送作家は自分のすべての作品を保存している。そして放送文化遺産として脚本・台本の収集・管理・保存を強く願っている。(41 ページ)

⑥ 脚本アーカイブズ実現は放送作家の強い願い

日本脚本アーカイブズ会館が実現した際には、これもまた80%近い放送作家が管理や保存、利用方法などに条件をつけながらも、基本的には寄贈しても良いと答えている。(46 ページ)

⑦ 放送作家全員が脚本アーカイブズ活動を望んでいる

日本脚本アーカイブズ会館が現実に動き出した場合、脚本・台本の寄贈だけでなく募金や協賛金で協力する、あるいはボランティアとしてアーカイブズ活動に参加したいとの答えは、回答者全員に上った。(50 ページ)

# 多彩なジャンルに進出する放送作家

## (1) アンケートの回答者数、性別、記名匿名の分布

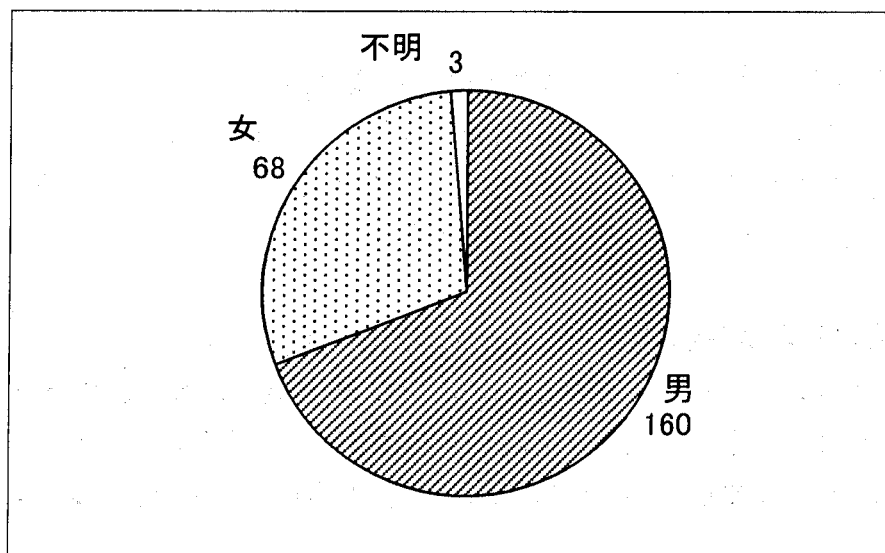
※有効回答者：231

※男性：160 女性：68 不明：3

※記名：228 匿名：3

【グラフ1 (回答者の男女比) 参照】

グラフ1 回答者男女比 (人数)



## (2) 結果の見方

- ① アンケート用紙に提示した質問ごとに回答結果をまとめ、対応するグラフをその下に提示した。
- ② グラフは円グラフまたは棒グラフで示した。ただし【グラフ2の④】だけは図式で表わした。
- ③ 複数回答を求める質問が多くその場合集計結果は100%を越える。そのため質問項目の最後に、「単一回答」であるか「複数回答」であるかを明記した。
- ④ アンケートの分析結果はグラフの下に載せた。自由記述を求めたアンケート結果は出来るだけ回答者の声をそのまま掲載するようにした。

# 大衆文化を支える放送作家の仕事の状況

質問1 あなたがこれまで携わってきたメディアはなんですか。

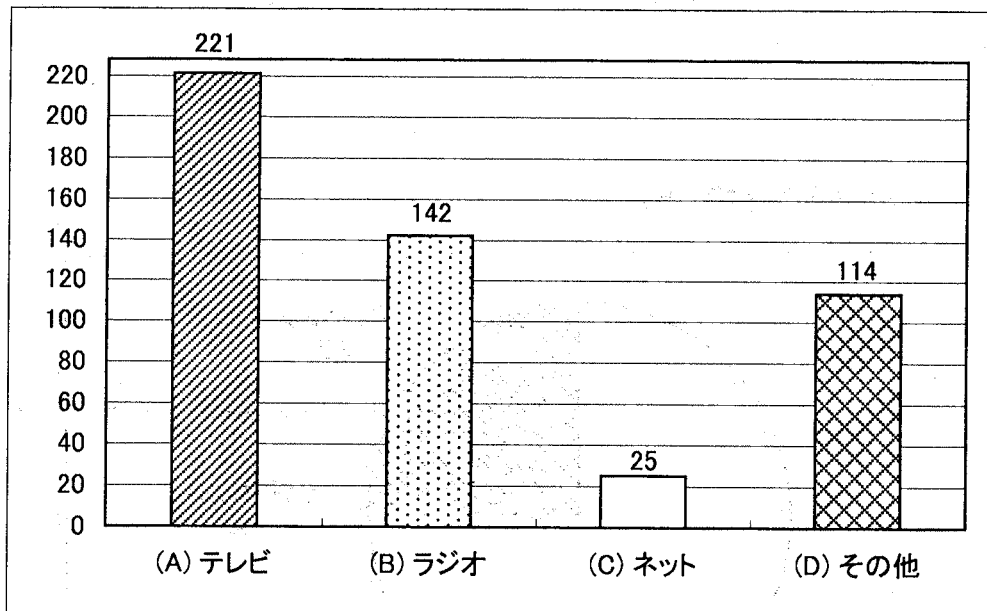
○印をおつけください。(複数回答)

\*質問1に対する回答者は228名(3名は回答なし)。その内訳は以下の通りである。

(A) テレビ	221人
(B) ラジオ	142人
(C) ネット	25人
(D) その他	114人

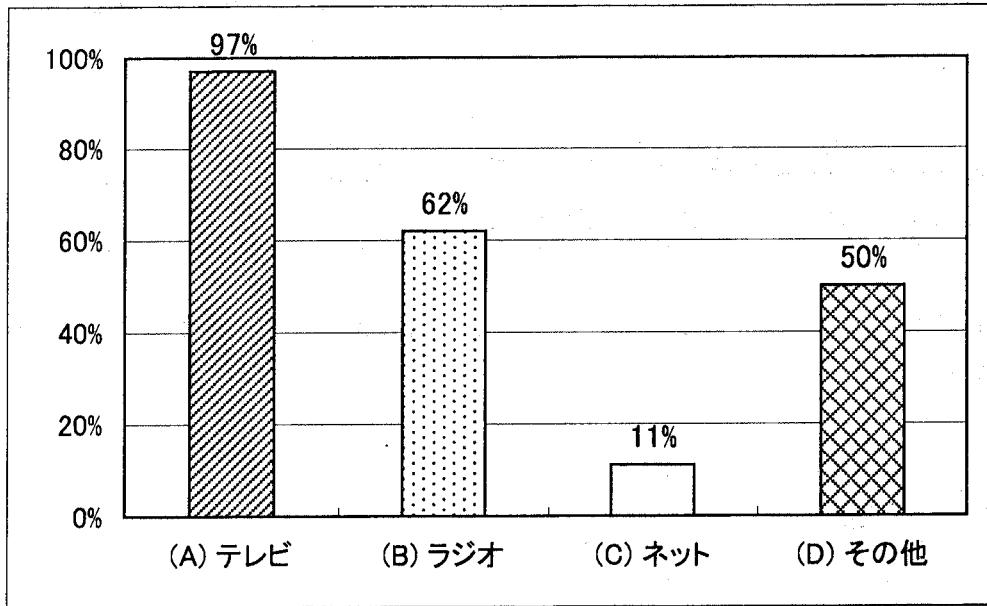
【グラフ2①～④参照】

グラフ2-① 回答者が携わっているメディア(人数)



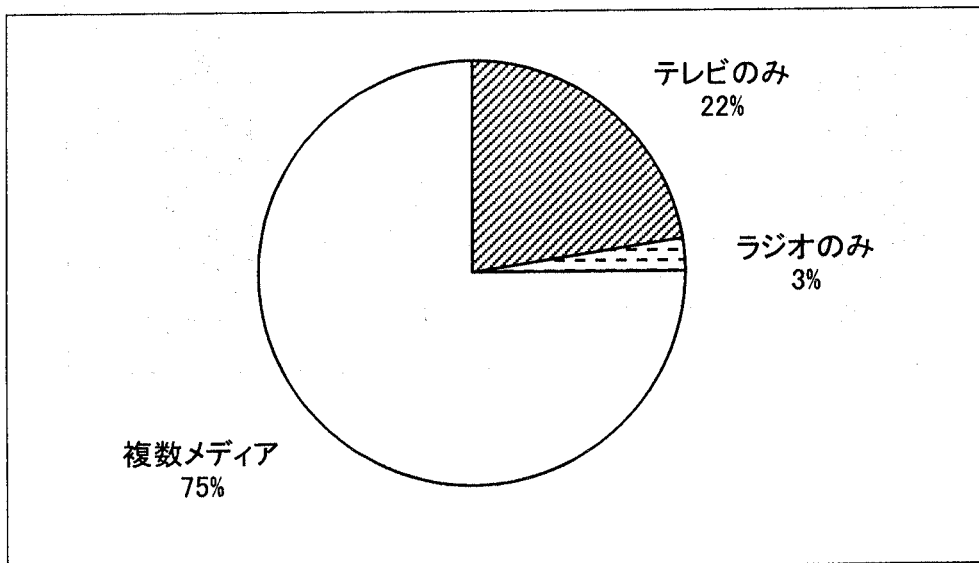


グラフ2-② 回答者が携わっているメディア (%)

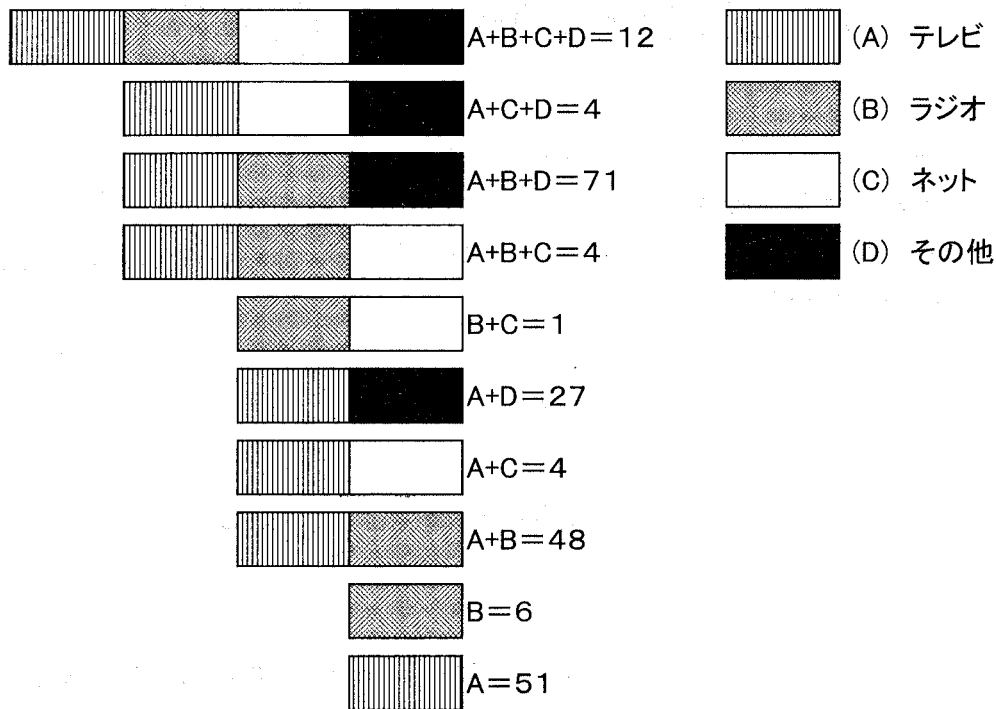


○全体の97% (221人) が「テレビ」、62% (142人) が「ラジオ」で仕事をしたと答えているのは放送作家として当然であるが、注目すべきは、「その他」の仕事と答えた人が114人と回答者の50%を占めた点である。**(グラフ2の①と②参照)**つまり、放送作家の4人のうち3人(75%)が「テレビ」と「ラジオ」以外の仕事をしている(または、してきた)ことが分かる。

グラフ2-③ メディアの比較 (%)



グラフ 2-④ メディアの比較 (人数)



○さらに回答者 228 人のうち、「テレビ」のみ (22%)、「ラジオ」のみ (3%) と、単一メディアでしか仕事をしていない人は合せても 25% (57 人) にしか過ぎず、複数のメディアで仕事をしている人は、75% で全体の 4分の3 (171 人) を占める。(グラフ 2 の③と④参照)

○グラフ 2 の④にはっきり表れているように、テレビとラジオを仕事の基本としながら (48 人)、「その他」のメディアでも広く仕事をする (71 人) のが放送作家の平均的な姿と言っている。中には「テレビ」「ラジオ」「ネット」「その他」と、すべてのメディアに関わって仕事をしている人が 12 人もいた。

## 放送作家の『その他』の仕事の内容

- 舞台（戯曲・ミュージカル・歌謡ショー・レビュー・イベント）
- 出版（新聞、雑誌、書籍）
- イベント、PRビデオ（企業・病院・都道府県・市町村・観光協会・写真集のイメージビデオなど）
- ラジオCM、テレビCM
- 音楽CD、CDドラマ、朗読ライブ、アイマックスシアター
- 携帯電話のサイト&小説
- 民族芸能、洋舞、邦舞、浄瑠璃（義太夫）など。

○古典芸能からIT分野まで、放送作家の仕事は多岐にわたる。携帯電話のサイトの仕事というのはいかにも今様であるが、今後こういった仕事はますます増加すると思われる。また民族芸能、洋舞、邦舞、義太夫の世界にまで放送作家が進出している事実は、我々がいかに多くの日本の伝統文化や大衆文化を支えてきたかを如実に物語るものである。

○当然ながらそれらすべてのジャンルに脚本・台本が存在する。その一方で、貴重な資料となるにもかかわらず、使い捨てで消えて行く脚本・台本が数え切れないほどある。都道府県や市町村などのPRビデオは、その時代その時代の郷土の歴史や風俗を知る上でも貴重な郷土誌（史）ともなりうるのではないか。また政治や経済など地方自治体の変遷と歩みの記録にもなる。こういった観点からも脚本・台本の重要性を改めて認識するべきではないだろうか。

# 放送作家のメインジャンル

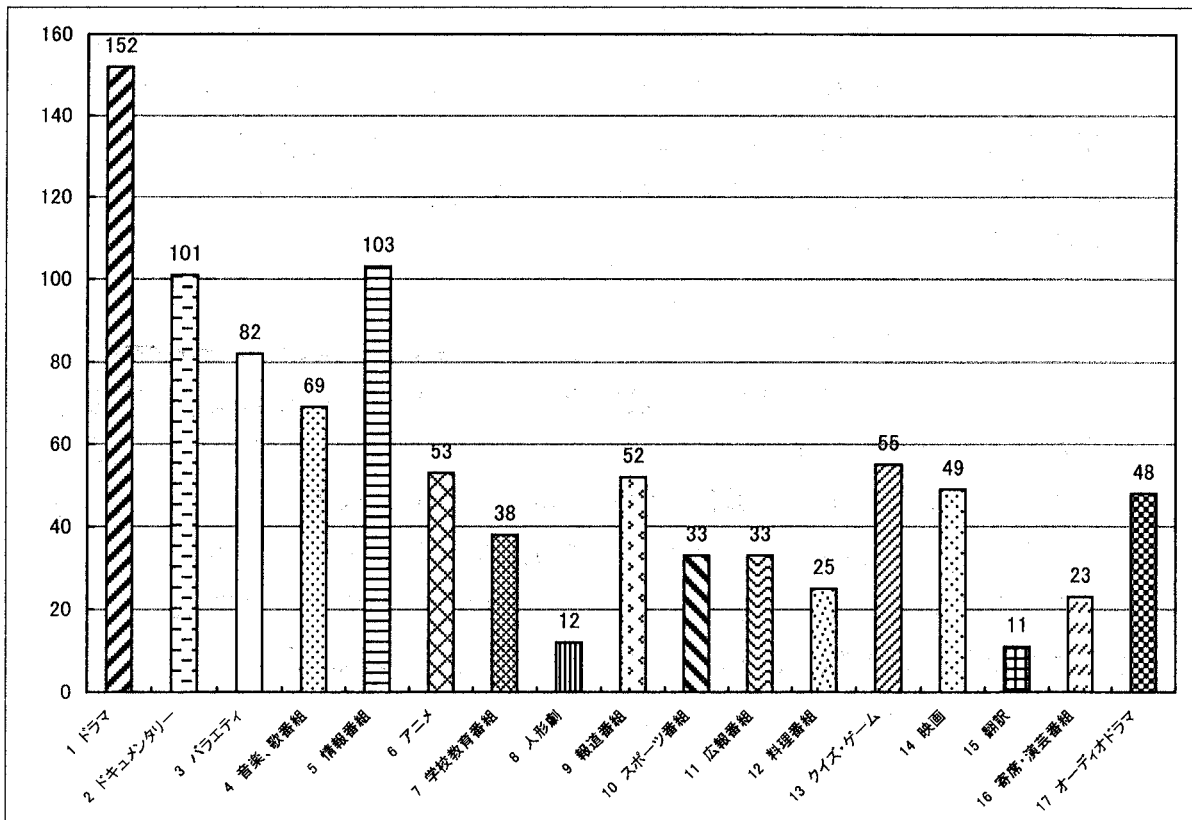
質問2 あなたがこれまで携わってきたジャンルはなんですか。  
○印をおつけください。(複数回答)

\*質問2に関する回答者は228人。その内訳は以下の通りである。  
(順不同)

- |                        |                   |
|------------------------|-------------------|
| 1 ドラマ (152)            | 10 スポーツ番組 (33)    |
| 2 ドキュメンタリー (101)       | 11 広報番組 (33)      |
| 3 バラエティー (82)          | 12 料理番組 (25)      |
| 4 音楽・歌番組 (69)          | 13 クイズ・ゲーム番組 (55) |
| 5 情報番組〔生活・社会・娯楽〕 (103) | 14 映画 (49)        |
| 6 アニメ (53)             | 15 翻訳 (11)        |
| 7 学校教育番組 (38)          | 16 寄席・演芸番組 (23)   |
| 8 人形劇 (12)             | 17 オーディオドラマ (48)  |
| 9 報道番組 (52)            |                   |

【グラフ3参照】

グラフ3 回答者が携わっているジャンル (人数)



○17ジャンルのうち14ジャンルにわたって仕事をした回答者が1人。ついで12ジャンルが3人、11ジャンルが2人、10ジャンルが10人。少なくとも一人平均4ジャンルにまたがって仕事をしている放送作家の現実が明らかになった。例えばドラマだけ、ドキュメンタリーだけというように、1ジャンルでしか仕事をしていない放送作家は、ほんの一握りにすぎない。ここでも放送作家が多岐にわたって仕事をこなしている姿が数字であきらかにされ、多くの脚本・台本の存在が裏付けられた。

### ジャンル別に見る『仕事ベスト10』

1位	ドラマ	6位	クイズ・ゲーム
2位	情報番組〔生活・社会・娯楽〕	7位	アニメ
3位	ドキュメンタリー	8位	報道番組
4位	バラエティ	9位	映画
5位	音楽・歌番組	10位	オーディオドラマ

○上記の『仕事ベスト10』から、情報番組に携わる放送作家が非常に多くなってきたことが読み取れる。情報系の番組が増加しているのだ。いまや情報番組はドキュメンタリー、バラエティ、音楽・歌番組などよりも多く制作され、報道番組を合せれば番組に携わる放送作家の数はドラマ作家の数を越える存在となるのではないか。情報化社会と呼ばれグローバル化したテンポの速い現代。その生活に即した情報を随時提供し続けなければならないテレビの使命が象徴的に現れている。

○だが、大きな問題も横たわっている。多くの情報を素材に多角的に台本を仕上げるため一本の番組に多数の放送作家が投入され、そのため著作権の所在が明確でなくなるのである。さらに公開された情報は“特別なもの”ではなくなるため、放送終了後、番組台本は“紙屑”として破棄されるケースが多い。今後さらに情報番組は増加するだろう。当然脚本・台本の数も飛躍的に増えることになる。脚本・台本と放送作家に対する制作者側の意識の変革、それらの保存・管理など、解決しなければならない問題は山積している。

## 放送作家と脚本・台本 その仕事量

質問3 あなたは現在までに何冊くらい脚本・台本をお書きになりましたか。  
分かる範囲内でお書きください。(自由記述)

\*回答者数は228人。回答結果によれば、

最少	10冊	2人
最多	6000冊	2人

○回答者でもっとも多かったのは、約100冊が20人。次いで1000冊から2000冊が16人だった。中には「2万本書いた」という回答もあり驚いたが、回答者は高名なコント作家であった。コント台本はどんなに短かくても1本と数える。成る程と納得した。中には「数え切れない」と答えた人も26人もいた。

その人の仕事のジャンル、キャリア、仕事量によっても脚本・台本の数は大きく異なってくる。例えば週1本情報番組を担当している放送作家は年間最低52冊の構成台本を書くことになり、週2本ならば悠に1年間で100冊は越える。

## 放送作家 脚本・台本に託すその意識

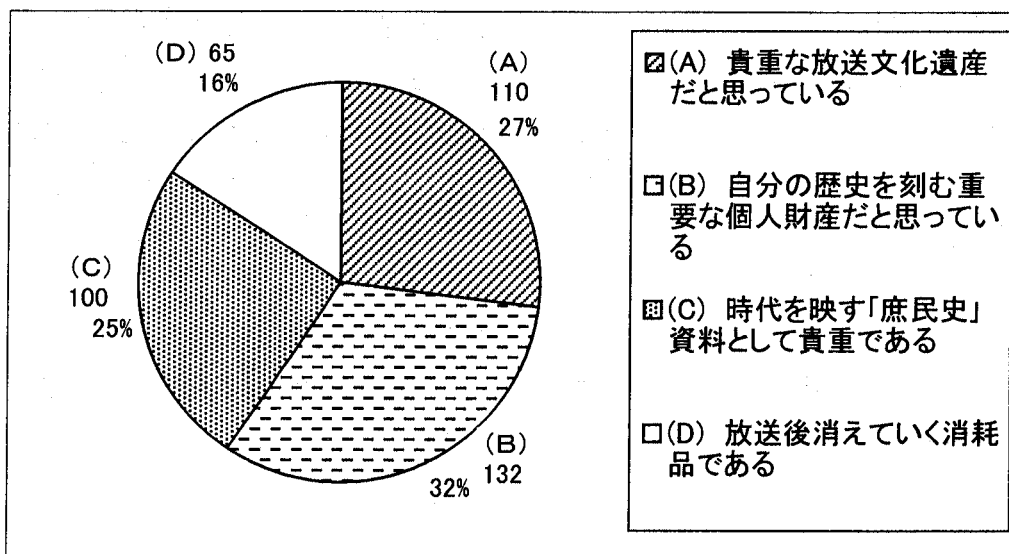
質問4 あなたにとって脚本・台本とはなんですか。  
○印をおつけください。(単一回答)

\*質問4に対する回答者数は231人、結果は次の通りである。

(A) 貴重な放送文化遺産だと思っている	110人
(B) 自分の歴史を刻む重要な個人財産だと思っている	132人
(C) 時代を映す「庶民史」資料として貴重である	100人
(D) 放送後消えていく消耗品である	65人

【グラフ4参照】

グラフ4 放送作家にとって脚本・台本とは(上段：人数 下段：%)



○録音テープ、ビデオテープなどなかった時代は、放送作品はすべてその場限りの消えていくものであった。65人が自分の汗と努力の結晶ともいふべき作品(脚本・台本)を(D)「放送後消えていく消耗品だ」と銜ってみせたのは、昔気質の作家の逆な意味での“プライド”の表れではないか。

○グラフ4をご覧いただいておりますように、脚本・台本を「放送文化遺産」「自分の歴史を刻む個人財産」「時代を映す『庶民史』資料」と考える回答者は(A)、(B)、(C)を合すると84%にのぼる。自己の作品の存在意義を強く意識し、放送作家としての誇りをうかがわせるとともに、脚本・台本を自らの分身としてとらえていることが分かる。

○現在になってようやくNHKやキー局と呼ばれる一部の民放テレビ局（その中でも限られた部署ではあるが）は、印刷された脚本や台本にナンバーを入れるなどして保管・管理を徹底するようになったが、これまでの脚本・台本に対するテレビ局、ラジオ局、その他メディアの扱いは、無造作に破棄され簡単にコピーされるなど、放送作家の思いとはかけ離れた現状にあった。今現在もその状況は多くの放送局で改善を見ることなく続いている。

## 放送作家と脚本・台本 散逸する現状

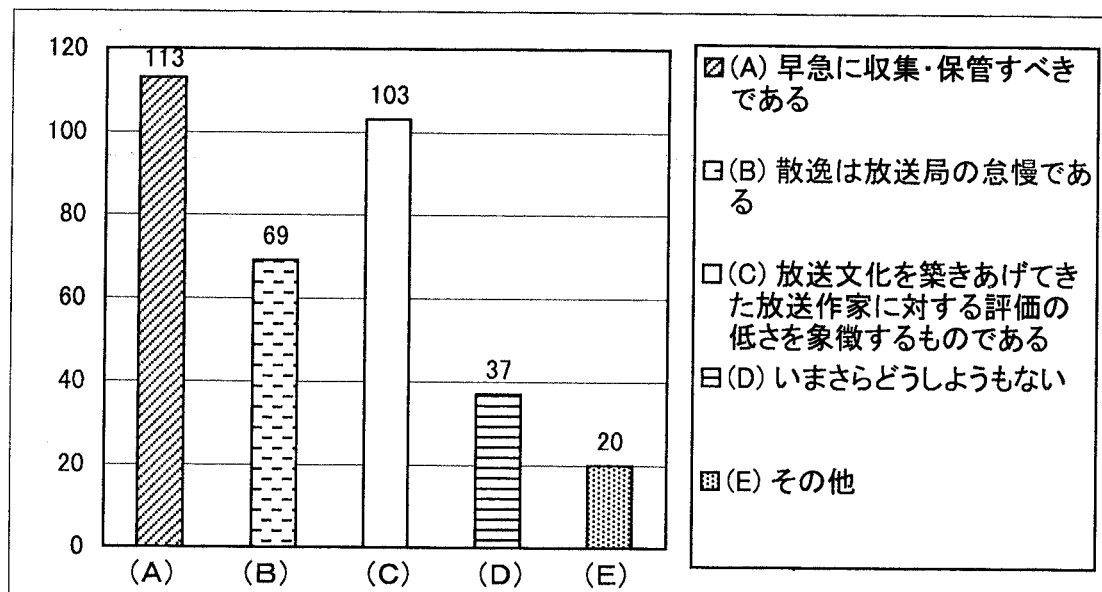
質問5 現在多くの脚本・台本が散逸しています。この現状をどう思いますか。

○印をおつけください。（複数回答）

- |                                        |      |
|----------------------------------------|------|
| (A) 早急に収集、保管すべきだ                       | 113人 |
| (B) 散逸は放送局の怠慢だ                         | 69人  |
| (C) 放送文化を築き上げてきた放送作家<br>に対する評価の低さを象徴する | 103人 |
| (D) いまさらどうしようもない                       | 37人  |
| (E) その他                                | 20人  |

【グラフ5参照】

グラフ5 脚本・台本の散逸状況について(人数)





○この結果から回答者の怒りが感じられる。回答者の約33%はすぐにでも  
(A)「散逸した脚本・台本の収集と保管を行うこと」を望み、5人に1人(20%)  
が(B)の「散逸は放送局の責任」としている。またこのような状況を生ん  
だ背景には、(C)「放送作家に対する評価の低さがある」(30%)と手厳し  
い。このことから回答者のほぼ80%が脚本・台本の取り扱いや現状に、憤  
りを覚えている事が分かる。

\*すでに前段で述べたが、情報番組の現場(報道局も含めて)でよく見られ  
る脚本・台本の大量コピーや、番組終了時に無造作に破棄されるケースが  
少なくないことに対しても、次のようなアンケート結果が出ている。(回答  
者は221人。単一回答)

(A) 腹が立って悲しい思いがした	46人
(B) このままの状況にしておくのは間違いである	127人
(C) 消耗品だから仕方がない	48人

○「消耗品だから仕方がない」と諦めている人は2割に過ぎない。大量コピー  
や破棄される現状に怒りを覚え、この状況をなんとかしようと考えている放  
送作家は合せて80%に上った。

## 放送作家と脚本・台本 その管理保存状況

質問6 あなたは自分の作品の脚本・台本を保存していますか。

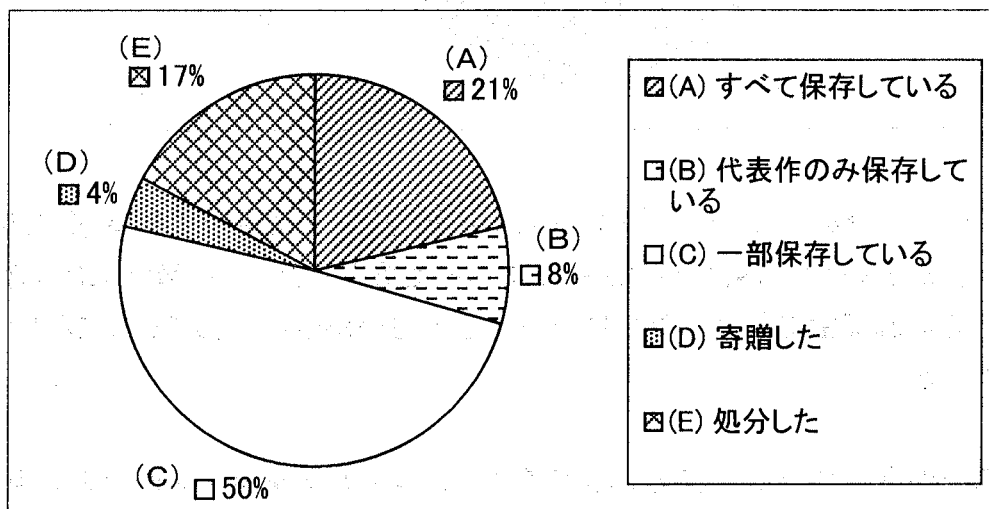
○印をお付け下さい。(単一回答)

\*質問6についての回答者は261人。集計結果を以下に記す。

(A) すべて保存している	56人
(B) 代表作のみ保存している	21人
(C) 一部保存している	128人
(D) 寄贈した	11人
(E) 処分した	45人

【グラフ6の①参照】

グラフ6-① 脚本・台本の保存状況



○回答者の作品への自信と強い愛着が感じられる結果だ。グラフ6の①で明らかのように、(A) すべて保存している、(B) 代表作のみ保存している、(C) 一部保存している、(D) 寄贈した (これも保存のための手段と考えるべきだろう)、を合すると**どんな形であれ保存している人は全体の83%を占めた**。質問3でのアンケート結果を裏付けるものと言える。

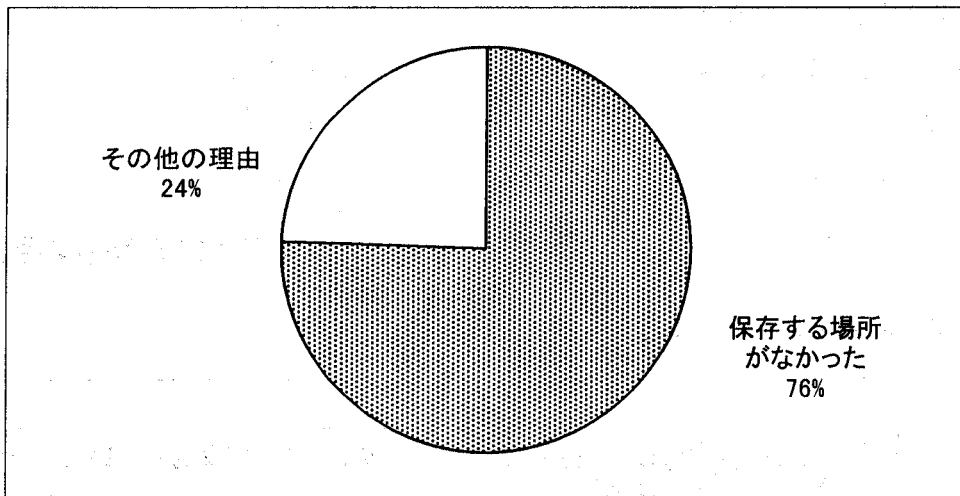
質問4では脚本・台本を「放送文化遺産」「自分の歴史を刻む個人財産」「時代を映す『庶民史資料』」と考える人は84%に上った。回答者たちが脚本・台本の存在意義を強く意識していることがうかがわれた結果だった。

\*次に（E）処分したと答えた回答者45人に注目、さらにアンケートを進めた。彼らの処分理由は何であったのか。以下がその結果である。

- ① 保存する場所がなかった 34人
- ② その他の理由 11人

【グラフ6の②参照】

グラフ6-② 脚本・台本を処分した理由



○グラフ6の②で分かるように、「脚本・台本を処分した」と答えた回答者の約76%は、実は保存する場所がなかったための処置だった。この数字には「保存場所さえあれば捨てなかったのに……」との思いが込められているのではないだろうか。

\*ところで保存していると答えた回答者は、脚本・台本を現在何冊ぐらい所蔵しているのだろうか。このアンケートに196人が回答を寄せた。

(単一回答)

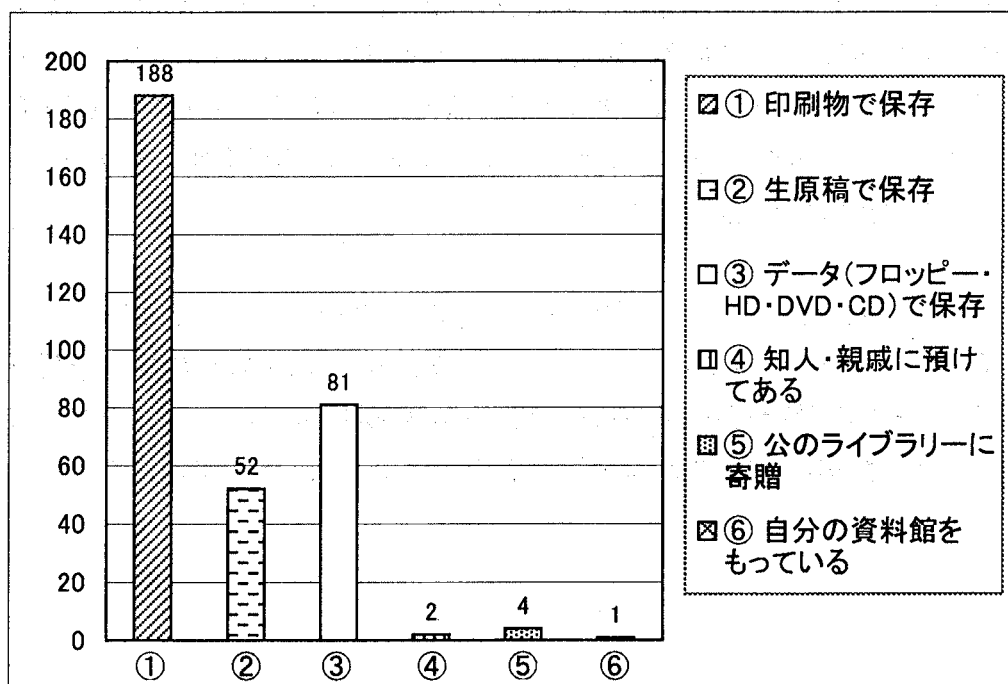
- ① 100冊以下 110人 (56%)
- ② 101冊から200冊 32人
- ③ 201冊から300冊 16人
- ④ 301冊から400冊 11人
- ⑤ 401冊から500冊 10人
- ⑥ 500冊以上 9人
- ⑦ 1000冊以上 8人

\*続いて現在所蔵する脚本・台本は、どのような形で保存しているのだろうか。231人が複数回答でアンケートに答えてくれた。

①印刷物で保存	188人
②生原稿で保存	52人
③データ（フロッピー、HD、DVD、CD）で保存	81人
④知人・親戚に預けてある	2人
⑤公のライブラリーに寄贈	4人
⑥自分の資料館を持っている	1人

【グラフ6の③参照】

グラフ6-③ 脚本・台本の保存状態(人数)



○印刷物というのは、印刷して綴じられた脚本・台本の事である。生原稿というのは<手書きの原稿>を意味する。ちなみにフロッピーなどにデータとして収められたものは<オリジナル原稿>と呼ばれている。

今回の調査結果では、回答者の約8割が印刷物で保存していた。保管場所は自宅の戸棚や本棚、家が狭いため食器入れの一部や押入れに突っ込んでいるという人もいた。公のライブラリーに寄贈したり自分の資料館を持っている恵まれた人はわずか2%、たった4人に過ぎない。

このアンケートから作品の保存を強く望みながらも、保管場所に苦勞している放送作家たちの姿が目につく。

- 回答者にデータ保存が多いのも住環境が大きな理由のひとつになっているものと思われる。今後自宅での保存はデータ形式による保存が増えていくのではないか。
- ただここで忘れてはならないのは、回答者が**データ保存よりも、印刷物や生原稿での保存にこだわりを持っている**ことであろう。しかし生原稿や印刷物は年数の経過と共に管理・保存は極めて難しくなるという。日本脚本アーカイブズ会館が設立された場合、この回答者のこだわりや思いをどう生かしてあげられるか、管理・保存の経費をどうするか、大きな課題のひとつになりそうだ。
- もうひとつの不安は、データ保存が絶対安全な保存法ではないということである。VTRの保存は保存環境が良くてもせいぜい10年といわれているが、実はデジタル保存でも期間は限られているという。CDやDVDでも約30年程度（アーカイブ事典「第10章マイクロフィルムとデジタルアーカイブ」より・大阪大学出版会）ということだ。
- 書庫には限界があり、すべて印刷物や生原稿で保存管理してはアーカイブズ会館がいくつあっても足りない。会館設立に際して**脚本・台本の管理保存は、現物とデータ保存との両面で行うことが必要**と思われる。この件の詳細については、次年度以降の管理・保存部会の分析にまかせたい。

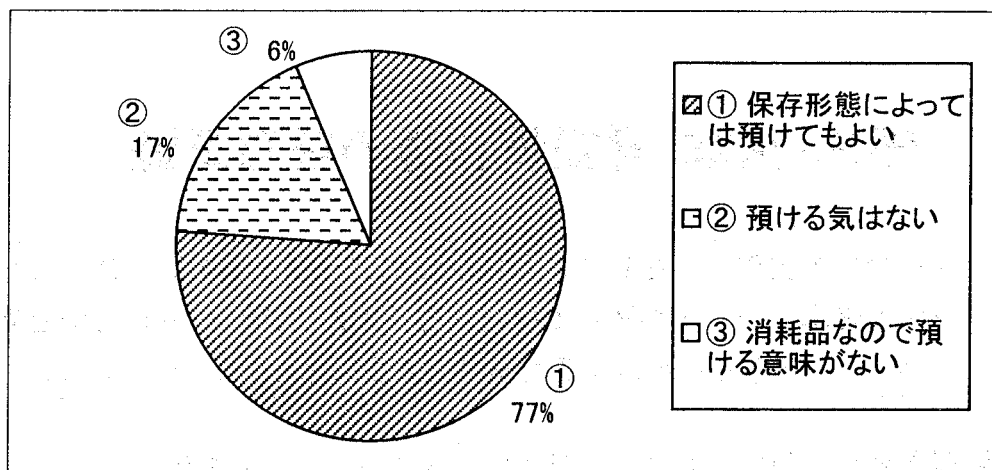
# 日本脚本アーカイブズへ向けて

質問7 脚本・台本その他の資料など、保存してくれるところがあれば預けたいと思いますか。○印をおつけください。(単一回答)

- |                   |      |
|-------------------|------|
| ① 保存形態によっては預けても良い | 141人 |
| ② 預ける気はない         | 32人  |
| ③ 消耗品なので預ける気はない   | 12人  |

【グラフ7の①参照】

グラフ7-① 脚本・台本の保存に対する意識 (A)



○回答者数は185人。グラフ7の①から分かるように、「保存形態によっては預けても良い」という回答者は77%。脚本・台本を貴重な放送文化遺産、庶民史ととらえ、大切な個人財産であると答えた回答者が8割を越え、自分の作品を大切に保存している回答者も同じく8割を越えたことから見て、この77%は少ないように見えるかもしれない。

○しかし、②の「預ける気はない」32人(17%)の項目について、詳しく見ていく必要がある。このアンケートについての自由記述欄を見ると、「預ける気はない」と答えた32人の回答者の9割以上が、「仕事を引退した後、もしくは自分の死後には預けても良い」と答えている。現役として仕事を続ける間は、「過去の作品は執筆時資料として必要で、それまで手元においておきたい」というのである。

○つまり「預ける気はない」のは現在だけで、将来は保存形態が納得できれば預けても良いと考えているのである。

すなわち①と②を合せた実に回答者の94%が、自分の作品の管理保管場所を求めているということになる。

\*海外では脚本・台本を「文化」として保存・管理するアーカイブズが当然のように存在する。だが日本ではアーカイブズとしての機能を有する施設は、NHK放送博物館、横浜放送ライブラリー、早稲田大学演劇博物館、松竹大谷図書館、伝統芸能情報館、立命館大学ARC（アトリサーチセンター）、世田谷文学館、大阪府立上方演芸資料館、長崎県諫早市立諫早図書館など数えるくらいしか存在せず、脚本・台本だけを集めているところはない。我々が設立を目指す日本脚本アーカイブズ会館は、脚本・台本の寄贈からスタートしていきたいと考えている。そこで次のアンケートを行った。

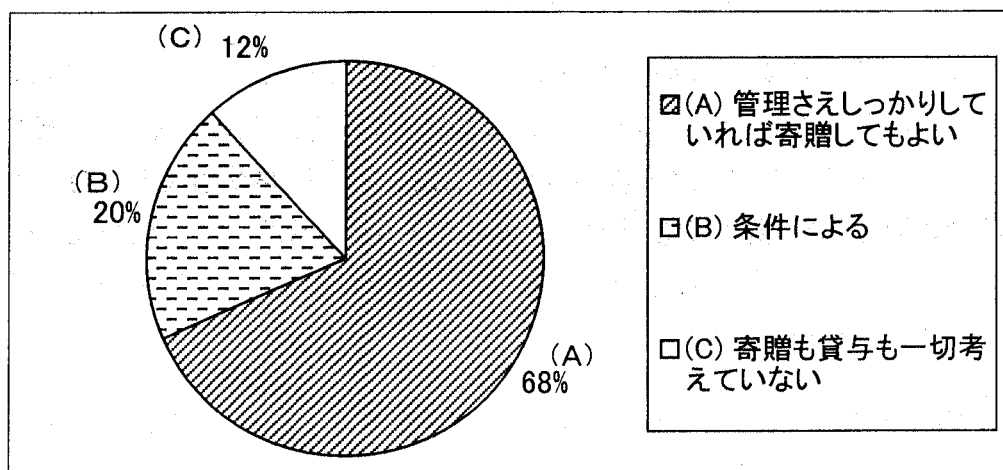
## 脚本・台本・番組資料等の寄贈意識

質問8 将来設立の実現を目指している日本脚本アーカイブズは、皆さんがご持ちの脚本・台本を寄贈していただくことからスタートしたいと考えています。あなたは寄贈するお気持ちがありますか。（単一回答）

- |                          |      |
|--------------------------|------|
| (A) 管理さえしっかりしていれば寄贈してもよい | 146人 |
| (B) 条件による                | 43人  |
| (C) 寄贈も貸与も一切考えていない       | 25人  |

【グラフ7の②参照】

グラフ7-② 脚本・台本の保存に対する意識 (B)



○回答者214人の内7割近い人が寄贈してもよいと答えた。(B)の条件による(その多くが著作権のクリアを挙げ、それが解決すれば寄贈するとしている)と答えた回答者と合せると、**回答者のほぼ90%が「日本脚本アーカイブズ」実現の際、所蔵する脚本・台本を寄贈する考えがあることを明らかにした。**

○次に回答者が挙げた「条件」を見ていきたい。

著作権や保存・保管法などについての条件提示以外に、収集にあたって郵送料を負担すること、アーカイブズ寄贈者には利用上の特典を、利用は原則有料に、といった実際的な運営上の意見も出された。

○さらに、「日本脚本アーカイブズ」の設立目的について、寄贈を快諾した回答者の声を以下にまとめる。

## 日本脚本アーカイブズに期待する放送作家の声

- 脚本・台本をデータベース化し、作家間の利用を可能にして欲しい
- 庶民の歴史資料(風俗的な部分も含め)として欲しい
- 構成作家を目指す人のための教材として使って欲しい
- 脚本も立派な活字文化。“シナリオ市民権”(せめて戯曲並み)を確立し、シナリオ形式のまま一般図書として出版したい
- 時代の資料にして下さい
- 脚本家志望の人に参考書として利用して下さい
- 舞台台本ならば是非再演して欲しい
- 後世の人にとって「人生の道標」となり、「想像力の源」になってくれればそれでよい



\*脚本や台本と同様に、番組制作に欠かせない進行表やQシートなども放送文化資料のひとつとなる。そこでこんなアンケートも行ってみた。

質問9 脚本や台本と同様に、進行表やQシートなども大切な放送文化資料のひとつです。それらをお持ちの方、寄贈するお気持ちはありますか。  
○印をおつけください。(単一回答)

- |         |     |
|---------|-----|
| ① はい    | 68人 |
| ② いいえ   | 19人 |
| ③ 条件による | 21人 |

○回答者が108人に留まったのは、脚本や台本以上に進行表やQシートの保存が少ないということだろう。③の「条件による」は、質問8と同様条件さえ満たされれば「寄贈してもよい」という意思表示である。

①と③を合せれば回答者の80%以上が、脚本・台本と同じく進行表やQシートなどの放送文化資料も、アーカイブズに寄贈してもよいと考えていることが分かった。

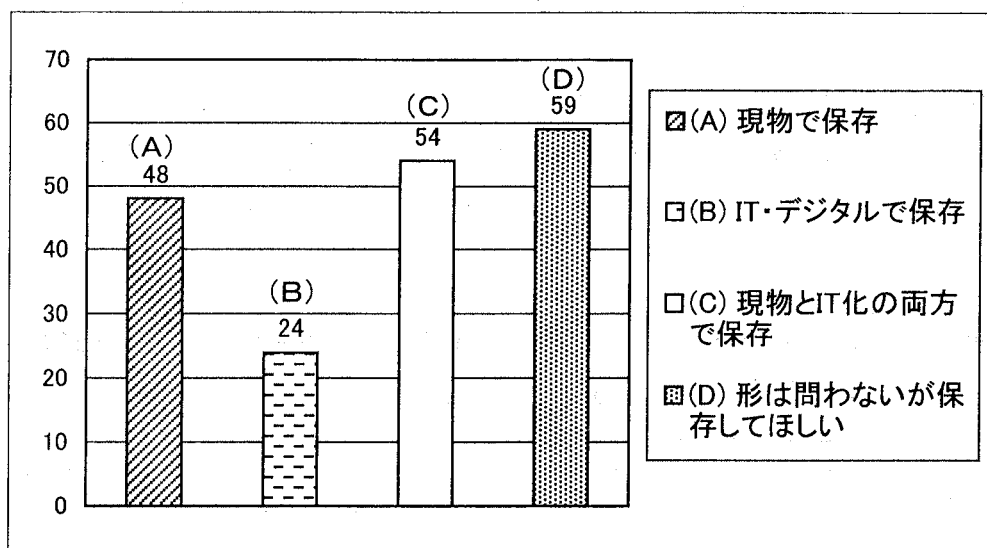
## 放送作家の望む脚本・台本の保存形態

質問10 寄贈しても良いと答えた方にお聞きします。あなたは脚本・台本をどのような形で保存してほしいですか。  
○印をおつけください。(単一回答)

- |                     |     |
|---------------------|-----|
| (A) 現物で保存           | 48人 |
| (B) IT・デジタル化で保存     | 24人 |
| (C) 現物とIT化の両方で保存    | 54人 |
| (D) 形は問わないが保存してほしい。 | 59人 |

【グラフ8参照】

グラフ 8 回答者が望む脚本・台本の保存形態（人数）



○この質問の回答者は185人。(D)の「形は問わない、とにかく保存してほしい」(3割)という希望に、放送作家たちの脚本・台本に対する強い愛着が感じられる。

○また放送作家が脚本・台本の保存にあたっては、出来れば「現物」で保存して欲しいと望んでいる事も分かる。「現物」とは印刷製本された脚本・台本もしくは、手書きの生原稿を指すものと考えられる。

○すでに述べたように現物での管理・保存には難しい条件がある。その意味で(C)の「現物とIT化の両方で保存して欲しい」(約30%)との意見は、確実に自分の作品を後世に残しておきたいという気持ちの現われであろう。

「日本脚本アーカイブズ」が現実となった場合、耳を傾けるべきアンケート結果ではないだろうか。

## 脚本・台本の利用と著作権

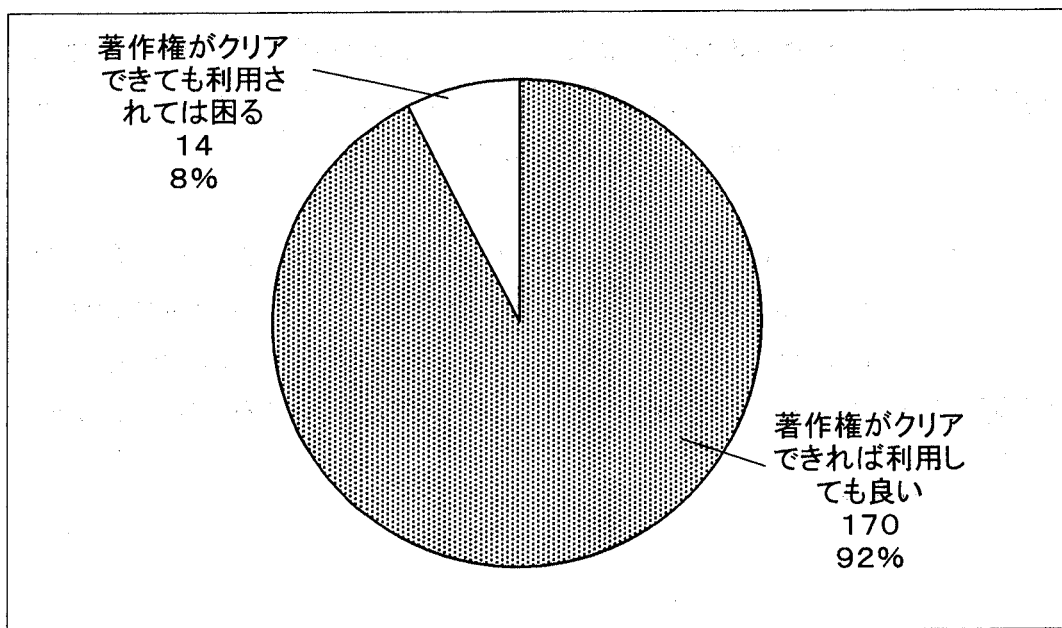
\*「日本脚本アーカイブズ」が設立された場合、放送文化の一拠点として様々な企画展、講演会、国際シンポジウムなどを国内外に発信していきたいと考えている。その場合、寄贈された脚本・台本の利用をどう思うか聞いてみた。

質問 1 1 著作権がクリア出来れば、あなたのお書きになった作品の脚本・台本を利用してもかまいませんか。  
○印をおつけください。(単一回答)

- (A) はい・・・利用してもよい 170人(約92%)  
(B) いいえ・・・利用に反対 14人(約8%)

【グラフ9参照】

グラフ9 脚本・台本の利用と著作権について(上段:人数 下段:%)



○この質問の回答者は184人。90%を越える回答者がその利用を快諾してくれた。有意義な再活用を望んでいると思われる。企画、展示、シンポジウムなどの他にも、インターネットを使った利用、学校教育への取り組みなど、アーカイブズが独自の活用の仕方を考え仲間の放送作家たちに提示していく必要がある。

## 「日本脚本アーカイブズ会館」実現と放送作家の協力

\* 「日本脚本アーカイブズ会館」が実現した場合、回答者たちにどの程度の協力が期待できるのだろうか。これをアンケート最後の質問とした。

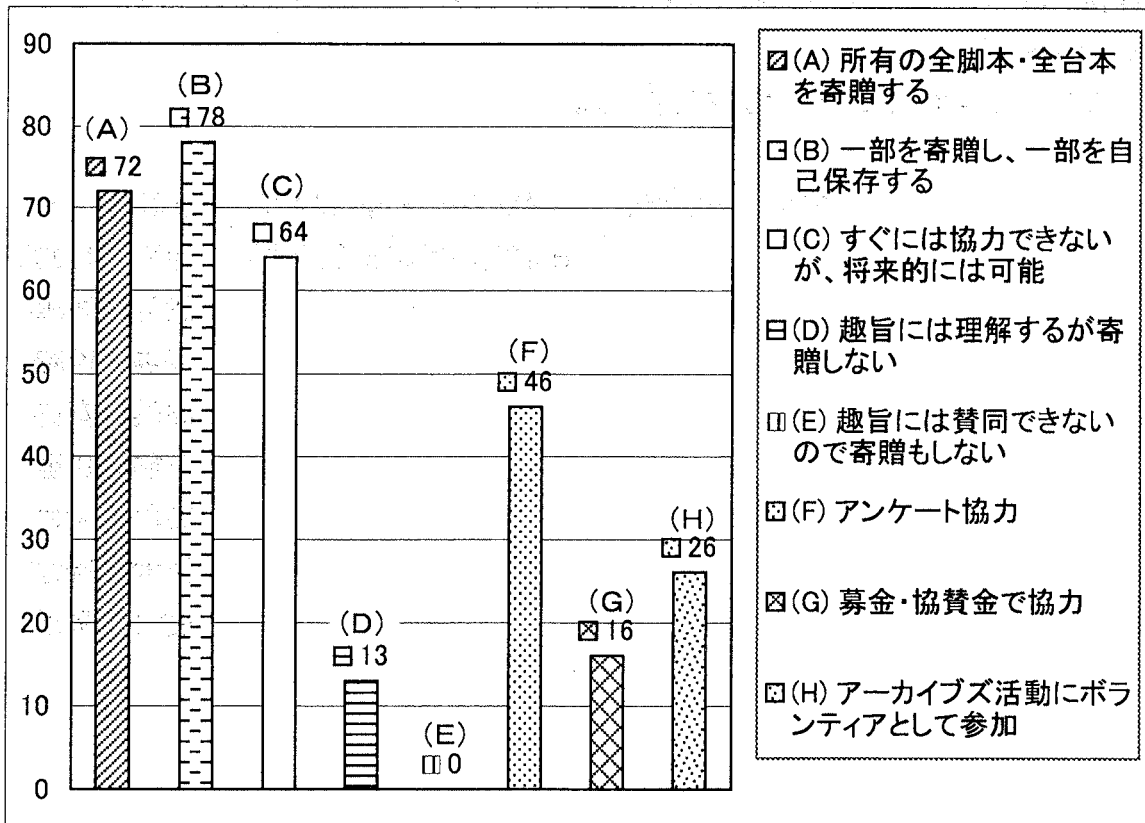
質問 1 2 日本脚本アーカイブズ会館が実現した場合、あなたはどの程度の協力が可能ですか。

○印をおつけください。(複数回答)

(A) 所有の全脚本, 全台本を寄贈する	72人
(B) 一部を寄贈し、一部は自己保存する	78人
(C) すぐには協力できないが、将来的には可能	64人
(D) 趣旨は理解するが寄贈しない	13人
(E) 趣旨に賛同できないので寄贈しない	0人
(F) アンケート協力	46人
(G) 募金・協賛金で協力	16人
(H) アーカイブズ活動に、ボランティアとして参加	26人

【グラフ10参照】

グラフ 10 「日本脚本アーカイブズ」によせる回答者たちの姿勢 (人数)



○回答者は231人。この質問に全員が答えてくれた。(E)「趣旨に賛同できないので寄贈しない」は一人もいなかった。(D)「趣旨は理解するが寄贈しない」13人の理由は、全員が手持ちの脚本が少ないために寄贈出来ないだけで、所蔵が多ければ喜んで寄贈するということであった。回答した231人すべてが「日本脚本アーカイブズ特別委員会」の趣旨に賛同し、脚本・台本の寄贈はもとより、何らかの方法で私たちのアーカイブズ活動に積極的に参加しようとしている姿勢がうかがえた。

以上が、私たち社団法人日本放送作家協会・日本脚本アーカイブズ特別委員会が実施した、準備から報告書作成まで4ヶ月をかけた、アンケートの結果報告である。

私たちの願いはまだ小さなうねりでしかない。しかし脚本・台本が国民の大切な放送文化遺産として収集、管理、保存に値するものであることを、遠からず国民が納得し、理解が得られる日が来ることを強く願うものである。

すべてはこれからである。

アンケート部会	日本放送作家協会理事	安達	充
	日本放送作家協会理事	鈴木	良武
		熊谷	知津
		馬場	絵麻
		高梨	安英
		石橋	映里
		石川	大和
		鈴木	晴香
		福田	秀雄

# Ⅲ 多彩な形の脚本・台本

## 平成17年度 収集・保存・管理部 第一次報告

### はじめに

一般的に脚本・台本というと、印刷されカバーがついた「本」や「冊子」を思い浮かべるかもしれない。大部分はその類だが、手書きのメモや数枚をホチキス等で綴じたものも台本である。原稿用紙に手書きしたものをコピーしたものもある。



また、台本には制作過程で演出家がカット割りをいれたり、手書きの台詞やメモの入ったものの他、俳優やカメラ、照明などのスタッフがメモをしたりしたものがあり、それも大事な要素である。

ドラマ脚本の場合、一稿二稿三稿と何度か改訂したものがあり、手書きで台詞を削ったり増やしたりするケースもあって、そのプロセスに興味深い内容が含まれていたりする。

(脚本家の承諾なしに現場で勝手に演出や役者が変えてしまうケースもあり、

これはこれで大問題であるが)

さらに脚本・台本には企画書があり、作品の意図や問題点を、出来上がった作品以上に詳しくかつ核心を突いていたりする。

当委員会では、脚本アーカイブズの柱のひとつが「文化財保存」であると位置づけ、まず保存・管理について研究を行った。

脚本・台本の性格上、書籍・雑誌が中心の図書館とは、おのずと違った方法で対処する必要がある。

対象が多用かつ膨大なものになるので、保存の仕方も一様ではない。ラジオ台本はもちろんテレビ放送初期の台本は、手書きやガリ版刷りのものが大半で、すでに黄色に変色しボロボロになったり虫食いになったものもある。

誕生した当時、テレビは生放送がほとんどで、放送されればそれで終わり、「保存」という考えはまったくなかった。

従ってテレビ草創期から10数年の間につくられた番組は、残っているものが極めて少なく、脚本・台本という形でしか残っていないものが多い。

テレビは時代の風俗や人々の趣味、趣向、価値観などをきわめてリアルに反映するものであり、脚本・台本の形でしか残っていない作品の資料的価値は極めて高い。

当委員会では、脚本・台本を5年10年という短いスパンではなく、50年後、100年後を

見据え、どのように保存・管理していくかを研究の柱にした。

研究のもう一つの柱は、保存したものを国民にどう「還元」するかである。図書館のように「閲覧」がまず考えられるが、脚本・台本は書籍のように読者に「読まれる」ことを前提に作られていない。

かといって死蔵しては意味がない。放送というメディアがつくりだした「文化遺産」を多くの国民にどのようにして還元していくか。著作権の問題もクリアしなければならず、そう簡単な問題ではないが、デジタル化の問題も視野におき、今後の可能性についても研究した。

## I 収 集

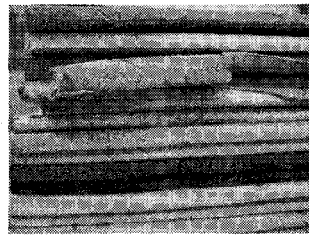
### 日々消えていく脚本・台本

現在、残っている脚本・台本はどの程度の数なのか。(これは実態調査部で触れる)。残っていたとして、持ち主が脚本アーカイブズに寄贈してくれるかどうか、現段階では未知数である。

そもそも脚本・台本は書籍などちがって、限られた部数しか作られていない上、現役作家の場合、自分のところに保存しておきたいという人も多い。

今後、新しくつくられる脚本・台本に関しては比較的、収集しやすいが、問題は過去の脚本・台本である。放送されればそれで終わりという考えがあったため、すでに廃棄されてしまったものも多く、残っていたとしても1冊のみといったケースが多い。さらに「長期保存」を考えずにつくられているので、傷みの激しいものが多く、一口に「収集」といっても、そう簡単ではない。

一方で古い脚本・台本は、日々失われてい



っている。文化的に貴重な情報が含まれているものもあり、1日も早く収集作

業を開始する必要がある。

2005年10月1日、準備室が発足してから既に何人かの関係者から脚本・台本の寄贈があった。その中にこんなケースがあった。

日本放送作家協会所属の放送作家で、アンケート用紙が届いたとき、不幸にして亡くなっていた会員がいた。後の処理を担当した甥という方から脚本・台本の処分に困っていると、アンケートの記入用紙に記されていた。準備室から早速、電話をしたところ、昨日、廃棄業者に渡してしまったということだった。年配の放送作家であり、当然、残っていた脚本・台本も古く、手書きやメモなどもいりまじっていたという。しかし、甥の方には「ゴミ」としか思えなかったようだ。手元に5冊ほど残っているとので、送っていただいたが、「ゴミ」として捨てられたものの中に「宝」があったかもしれない。

見た目と中味の価値はまったく関係がないのだが、こんな形で貴重な「文化遺産」が日々消えていっている。書いた本人ばかりでなく、出演者、スタッフ等に対象をひろげれば、このようなケースは頻繁に起こっているものと推定される。

### 寄贈が原則

前述したような損失を回避するため、特にテレビ草創期から2、30年の間に作成された脚本・台本に関しては、できるだけ早く組織的に収集作業を開始する必要がある。

収集にあたっては「寄贈」を原則にしたい。その理由は、「借用」となると、事務的手続き

が煩瑣になり、また受け取った段階でボロボロになっていて、その形のまま保存することが困難なものもあり、「貸し手」に「質」を保証できない。

映画や演劇の脚本を中心に収集・管理している早稲田大学演劇博物館や松竹大谷図書館でも「寄贈」に限るとしている。

脚本・台本を保持している人は、大きくわけて次の三者にわけられる。

★現役作家。

★遺族等の関係者。

★第三者（制作スタッフ、俳優、個人収集家）。

現役作家の場合、本人が保持しているため比較的、収集しやすいが、すでに触れたように本人が手元に置いておきたいケースがある。本人が複数冊所持していることは少ないので、脚本アーカイブズの趣旨を理解していたき寄贈に応じてもらうか、いずれ脚本アーカイブズに寄贈するという「約束」を文書でかわすことも必要である。

さらに脚本・台本を保存している人のリストを作るなどして、消失をふさぐ手だてを考えることが急務である。

当協会の他、シナリオ作家協会や劇作家協会、さらにどこにも所属していない書き手にも呼びかけたい。

そのためには脚本アーカイブズについてのPR活動が重要になってくる。準備室ができたことを知って、寄贈したいという人が増えている。現在、足立区の学びびあ内の一室に保存しているが、今後寄贈が増え続けると、断るケースが出てくるかもしれない。

ただ上記したように、書籍などと違って「限られた関係者」にしか配布されない性質上、一旦廃棄された脚本・台本を二度と手に入れることはむずかしい。テレビ創成期はもちろん録画装置が普及する以前の番組は、脚本・台本という形でしか残っていないものが多い。

しかも、その種の古く貴重な脚本・台本は保存状態もよくなく、書いた本人が物故されたりすると、廃棄される可能性が強い。

精魂かけて執筆したに違いない貴重な資料が日々失われていることは、悲しい現実である。失われたものは「絶滅品種」と同じで二度と戻ってこない。「文化財保護」の観点からも、出来るだけ早く収集システムの確立が望まれる。

### 収集の方法と経費等

収集の方法として、脚本・台本をいれる専用の小包ケースをつくり、そこに収納して郵送か宅配便で送ってもらうか、大量の場合は脚本アーカイブズから直接受け取りに行くことが考えられる。

これにかかる費用について以下の試算をした。

#### 【専用小包ケース】

1万冊を収集する場合。

台本1冊を平均200gとして、梱包材等を含み1箱について約100冊を封入する。

計100箱が必要となる。1箱の単価を150円として1万冊分で15,000円。特注ケースの発注は500個前後からの受付なので150×500=75,000円。

#### 【輸送費】

仮にヤマト便で送るとなると……。

25kg×160cm（縦・横・高さの合計）サイズ（※最大サイズ）

台本1冊を平均200gとして、梱包材等を含み1箱について約100冊を封入

★関東～北海道 1,790円

★関東～関西 1,890円

★関東～沖縄 3,890円

上記3種から求められる平均の輸送費=1箱あたり2,523円で、1万冊とした場合、100箱が必要となる（箱数）。



100 (個) × 2523 (円) = 252,300 (約 25 万円)

#### 【人件費】

収集・調査員 日当 15,000 × 400 人工 (4 人 × 100 日) = ¥6,000,000。調査にかかる通信費 (電話・郵便等) 月 10,000 × 12 = ¥120,000

-----  
小計 ¥ 6,120,000

この数字はあくまでも概算であり、実際に本格的に収集作業を行うと、この通りにはいかないかもしれない。一応の目安として考えていただきたい。

さらに 10 万 20 万と増えればそれだけ経費も増えていく。

一方で、脚本アーカイブズが具体化すれば、例えば書籍や雑誌は、出版される度に国会図書館への 2 部納付が義務づけられているように、法的裏付けを期待したい。制作段階で基礎となる脚本・台本を脚本アーカイブズに送ることが仮に義務づけられれば、収集はシステムティックになり経費も半減する。

法令化するの簡単ではないが、少なくとも制作サイドが、脚本・台本は「文化遺産」でもあるのだという認識をもつようになれば、収集の実をあげることができる。

当協会の市川理事長と NHK との話し合いで、今後脚本アーカイブズができた場合、番組制作に使用される脚本・台本はすべて 2 部ずつ脚本アーカイブズに送付するという合意が出来ている。民間放送連盟とも同様の話し合いを継続中である。

また、NHK のドラマ部では大河ドラマの脚本を中心に、デジタル処理、つまりメディア変換の作業を行っているが、NHK と当準備室との話し合いで、NHK ドラマ部でメディア変換したあとの脚本を順次、送付してもらうことになっている。

## II 保存・管理

### 資料保存の原則

脚本・台本を「アーカイブズ」として 50 年 100 年先を視野にいれて残すには、「保存の原則」をしっかりと確率しておく必要がある。

アーキビストの小川千代子氏を講師に招いた勉強会で、小川氏は「記録史料は内容だけでなく、その形態や材料までも含む全情報記録史を残しておく必要がある」と強調した。

この観点から、小川氏が提唱する以下のような保存・修復の 4 原則を、当部でも踏襲したい。

#### ①原形保存の原則

- ・保存にあたって、史料の原形（束・袋などのまとまり、史料の包み方、折り方、結び方）を出来る限り変更しない。
- ・保存手当て・修復措置は必要最小限にとどめる。
- ・出来るだけ原形を残す方法・材料を選択する。

#### ②安全性の原則

- ・史料に影響が少なく、長期的に安定した非破壊的な保存手当て・修復方法や材料を手当てする。

#### ③可逆性の原則

- ・史料を処置前の状態に戻せる保存手当て
- ・修復方法・材料を選択する。

#### ④記録の原則

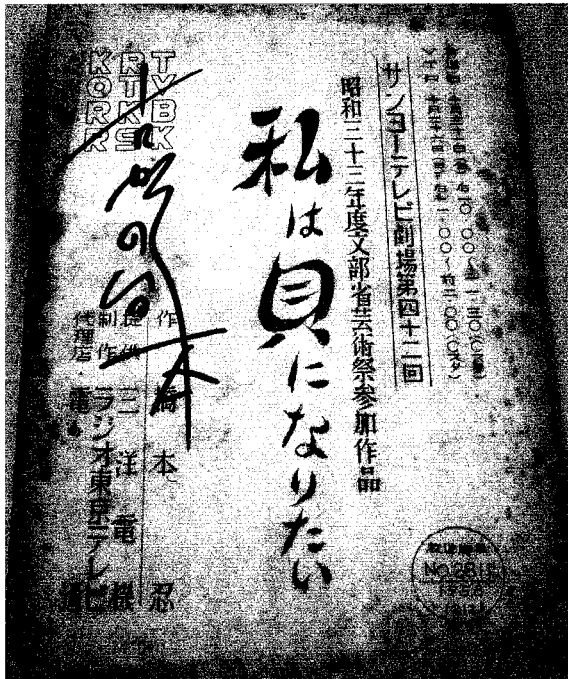
- ・保存の必要上、やむをえず原秩序や原形を変更する場合は、元の状態がわかるよう、克明な記録をとる。
- ・保存修復処置の記録をとる。

さらに整理保存管理のシステムは、その情報価値を「誰もが自由に」「科学的に」「永続的に」活用できるようにする必要がある。(『ア

一カイク事典』(大阪大学出版会)。基本的に以上の観点にたつて保存・管理の方法を考えていきたい。

### 既に収集された貴重な脚本・台本

2005年10月1日の準備室発足から5ヶ月ほどの間に、準備室にはすでに1000冊を超える脚本・台本が寄贈された。中には日本のテレビドラマ史に残る傑作『私は貝になりたい』などもあった。そのほか、すでに映像作品が失われ、脚本・台本でしか残っていない往年の話題作もある。以下、主な脚本・台本の一部を列挙すると――。



#### ○『私は貝になりたい』

(橋本忍脚本、フランキー堺主演) サンヨーテレビ劇場の枠で昭和33年(1958年)10月31日の22:00~23:45に放送された。第13回芸術祭大賞受賞。

戦時中、上官の命令で行った行為がBC級戦犯として問われ、絞首台に向かうことになる、市井の理髪師の辛く悲しい物語で、多くの視聴者の感涙を誘った。「ドラマのTBS」の礎にもなった作品。

#### ○『ドキュメントフィルム日本1960』

(構成:白坂依志夫、演出:岡本愛彦、構成監修:土門拳)。芸術祭参加作品。

KRT=現・TBSで昭和33年(1960年)11月25日、放送された。昭和33年(1960年)の日本の出来ごとを、その舞台となった各地の映像で集大成したドキュメンタリー。「ヒロシマ」「筑豊の子供たち」等で有名な写真家・土門拳の視点で、高度経済成長期の日本を独自の視点で切り取った、資料的価値の高い脚本。

#### ○『月光仮面〜第3部 マンモスコング編 第1回〜4回』(原作・脚本:川内康範)

#### ○『月光仮面〜第3部 マンモスコング編 第5回〜9回』(原作・脚本:川内康範)

昭和33年(1958年)放映。同年10月19日~11月30日放送分、計2冊。草創期のテレビジョンが生んだ初代ヒーローとしても有名だが、国産初の連続テレビ映画として放送文化・児童文化史的価値のきわめて高い作品。

#### ○『ダイヤル110番〜神戸から来た男』

(昭和38年(1963年)9月15日放送、脚本大津皓一)

※昭和32年(1957年)から昭和38年(1963年)まで放送された刑事警察・刑事ドラマの草分け。緊急電話のダイヤルが110番に統一された年に製作され、その啓蒙のため警視庁・警察庁が全面的に資料提供して製作された。

「事件が起これば110番」という意識は、この番組の人気により定着した。作家・向田邦子のデビュー作(第55話)としても名高い。

#### ○連続ドラマ『歌謡曲だよ人生は』

(脚本・早坂暁)昭和45年(1970年)1月3日放送開始。毎日放送制作。バラエティードラマという新ジャンルを模索していた時期で、主演の藤岡琢也、中山千夏以外のほとん

どは関西のお笑いタレントを配し、ドラマ中に唐突に歌謡曲が挿入されるなど、斬新な構成台本となっている。脚本は、早坂暁と佐々木守で、翌年のNHKの名作時代劇「天下御免」（脚本・早坂暁）は、このドラマの実験的手法を踏襲した形跡が認められる。ちなみに、昨年より刊行されている「早坂暁コレクション・全33巻」（勉誠出版）にも、掲載されていない貴重な台本である。

#### ○『欽ちゃんのどこまでやるの!』

（企画・構成・演出 萩本欽一 台本作家・パジャマ党他）。テレビ朝日制作。昭和51年（1976年）10月放送開始。萩本欽一と真屋順子が演じる夫婦の何気ない暮らしの中で繰り広げられる“お茶の間コント”。見栄晴、わらべ、斉藤清六、小堺一機、関根勤など多くのタレントを輩出し、最高視聴率42%を記録。70～80年代のテレビバラエティにおいて、一つの歴史を築いた作品。

#### ○『クイズ百点満点』

（台本作家：井上頌一、長野容子、他）NHK制作。昭和63年（1988年）4月10日～平成6年（1994年）3月20日まで毎週日曜19時20分～20時放送。

当時、NHKの解説委員だった田畑彦右衛門が、クイズの正解のコメンテーターを勤めクイズ番組というカテゴリーの中に、ニュース報道や社会問題等を積極的に盛り込んで制作された異色クイズ番組。時事ネタからクイズを出題した為、全放送を生放送で行ったのも特筆に値するが、ちょうどテレビ全体が“報道の時代”と呼ばれるニュース偏重に傾いた時期でもあり、クイズが単なる娯楽バラエティとして通用する時代ではなくなった事を物語る、貴重な台本資料でもある。

#### ○『ザ・ベストテン』

（構成：秋元康、他）第201回。TBSテレビ系で昭和

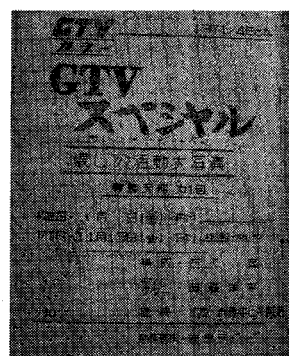


53年（1978年）1月から平成元年（1989年）9月にかけて毎週木曜日21:00から21:54に

放送された歌謡番組。黒柳徹子・久米宏の司会で、おそらく、同時代を生きていた人間ならば、知らない者は皆無と思えるほどの名歌謡番組である。計9年7ヶ月にわたって日本のテレビ界・歌謡界をリードする番組として君臨したが、バンドブームの隆盛と、歌謡曲の衰退によって、その役割を終えた。現在、これほど潤沢な定時歌謡番組が皆無という事を考えると、テレビの中心的存在であった歌謡番組の良き時代を物語る最後の資料と言っても過言ではない。

#### ○『懐かしの活動大写真・鞍馬天狗』

（構成：だて宏）昭和46年（1971年）、群馬



テレビ制作。昭和3年、寛プロ独立第1回作品である。主演の嵐寿郎主演が独立プロを設立したときの第1回映画作品。無声

映画で、弁士は松井春翠。弁士の「語り」なども入っており文化的にも価値がある。

#### 専門図書館等の保存・管理状況

当部では、保存・管理の参考とするため、

シナリオ・脚本を保存している既存の専門図書館を訪問し、保存・管理の状態を視察すると共に関係者から話を聞いた。

#### 松竹大谷図書館

昭和33年(1958年)に開館した演劇・映画の専門図書館で、松竹が運営している。閉架式で館内閲覧のみ行っている。資料類、台本など約38万点を所蔵。

- ★収集はテレビ台本は松竹制作のみ。映画は映倫から審査済みの台本を1年分まとめて寄贈されている。
- ★古い歌舞伎台本など「貴重」な資料は、別倉庫(耐火施設完備)に置かれている。
- ★図書館と同じ分類(700番台)だが、松竹制作作品、外国ものなど独自の分類を行っている。
- ★寄贈されたものは原則として廃棄せず「現物」保管している。
- ★薄い資料は板目紙(厚めの台紙)で作った表紙をその都度、裁断し、布紐をつけて結び、書棚に立てかける形で保存。
- ★2003年まではカード式の目録を使用していた。現在は作品名、作者名簿等はパソコンによるデータ検索が出来るようになっている。ただ「内容のデジタル化」は導入していない。
- ★スタッフは司書(学芸員を含む7人、他にボランティア)が常勤し、年間約2000冊増加する資料類を整理している。検索データのパソコンへの打ち込みはすべて職員が行っている。

#### 早稲田大学演劇博物館

昭和3年(1928年)10月、坪内逍遙が古稀の齢(70歳)に達したのと、その半生を傾倒した「シェークスピア全集」全40巻の翻訳が完成したのを記念して設立された。国内はもとより、世界各地の演劇・映像の貴重な資料

を揃えている。錦絵46,000枚、舞台写真200,000枚、図書150,000冊、その他衣装・人形などの演劇資料52,000点をあわせて、数十万点におよぶ。

- ★閉架式書庫で15万点ある蔵書(半分は映画演劇台本)は早稲田大学内に分散保管。館内のみ閲覧可能。台本・書籍に限らず舞台衣装や小道具などの大型展示もある。
- ★寄贈が原則。台本などは古くなくても現物自体が貴重なので廃棄しない。
- ★大量寄贈の場合は、特別に請求番号(たとえば森繁久弥の項目)をつけることもあり、別の場所にまとめて保存。
- ★台本に関しては、資質の問題(劣化)や書き込み等があるため、特別な部屋で閲覧してもらっている。複写は不可。
- ★台本はすべて中性紙の封筒に入れて保管し、まとめて箱にいれている。
- ★分類は図書館と同じ分類(700番台:映画・演劇)だが、その中で独自の分類を行っている。
- ★パソコンによる作品名・作者名による検索が可能だが、検索データ化されていないものも多数ある。WINE(早稲田大学学術情報検索システム)の検索データのみ(一部蔵書は立命館のARC(アートリサーチ・センター)と提携して一部データベースを作成)。
- ★台本の内容のデジタル化(データ化)は今のところ導入していない。予算の関係上、当面導入する予定はない。
- ★スタッフは30人ほど。年間3000点が増加している。(一般雑誌等購入を含む)。専任の収集係がいる。

※演劇博物館の活動:館内展開催のほか、演劇講座、館蔵資料の目録・図録の出版、他館で行われる様々な展覧会への協力等、多彩な活動を行っている。

## 諫早図書館

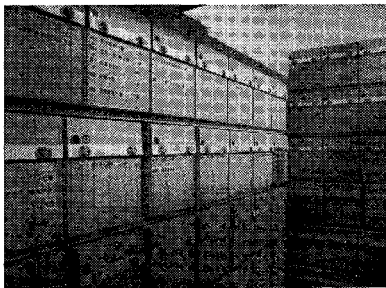
長崎県諫早市の諫早図書館には、当協会の市川森一理事長のシナリオを中心に約 4700 冊のシナリオ（シナリオ合本）それにビデオが保存されている。

★保存室は 25 平方メートル程の広さで、書架が四方の壁に並べられており、その書架に整然とシナリオ・本・ビデオ・市川氏関連の雑誌、新聞及びその切抜きもファイルされている。

★分類方式。ランダムに本及びシナリオの大きさ、形式別に陳列されている。それほど多いシナリオ数ではないので、このような展示方法でも十分に探索する側が混乱することなく、目的の本及びシナリオを探す事が出来る。大変コンパクトなわかり易い陳列方法と言える。この規模の陳列は年代別、作品別にするとかえって本の形状がバラバラになり、探しにくくなるという欠陥が出る。

★参考のため諫早図書館での古文書の保存状況に触れると……。

- ・一般的に古書はすべて中性紙の袋にいれて保存してある。
- ・中性紙は古文書の種類によって異なる。ページがばらばらか、そうなりかねない



状態のものは、中性紙の封筒にいれ本棚に縦に並

べて保管。

- ・封筒は、幅 20 センチ、高さ 30 センチの中性紙の段ボール箱にいれ、書架に並べて立てる。
- ・中性紙のハードカバー用のブックカバーで古文書をまとめて綴じ書架に立てる。

- ・鉄製枠のプラスチックの特殊な棚（特注）に、中性紙の半透明の薄紙で包んだ古文書（薄ものに限る）を並べて整理する。
- ・いずれも場合も索引コードを貼り付けると共に索引用の冊子を作成。
- ・中性紙の封筒、段ボール、ブックカバー等は東京の専門業者より取り寄せている。
- ・古文書は防虫のため窒素ガスによる洗浄を実施。ガスのバルブを壁に取り付ける方法と、専門業者に依頼して洗浄してもらう方法がある。諫早図書館では年一回程度、専門業者に依頼。

## 現物保存・管理のシステム

当部では、前記専門図書館の他、立命館アーカイブ・センターや放送ライブラリー、NHK放送博物館、世田谷文学館、さらには図書館統合展やデジタル機器をあつかう企業の官公庁向けフェアなどの視察を分担して行った。

それらの情報を持ち寄り検討した結果、実現可能で実効的な保存・管理として、現段階では以下のような形態がふさわしいと結論づけた。同時に問題点等も指摘したい。

脚本アーカイブズとしては――、

- ★専門図書館で実施しているように、閉架式が望ましい。
- ★前述したように脚本・台本は「長期保存」を前提に作られていないので、劣化の度合いも激しいものがある。「現物保存」を優先させる前提に立つと、早稲田大学演劇博物館が実施しているように、中性紙、あるいは板目紙を使用した保存がふさわしい。

## 中性紙による保存

〈利点〉特殊なもの以外は比較的容易に手に入る。何種類かの大きさの封筒を使い分けるだけであり、簡単かつ容易に作業を進められ

る。

〈問題点〉として、封筒に入れて管理するので、閲覧時の取り出しに少々時間がかかる。

#### 板目紙での保存

〈利点〉アスクル等大型文具を取り扱っている所で比較的安価で購入可能。厚手の紙で脚本・台本を囲う形となり、見栄えがよく、立て棚におけるので、背表紙からタイトル・作者名などが簡単に読み取れる。布紐で綴じられているので安定する。閲覧の際に便利。

〈問題点〉板目紙による表紙カバーをその都度、脚本・台本の厚み・大きさに合わせて個別に切って合わせなければならず、見栄えの悪いわりに手間暇がかかる。(松竹大谷図書館ではボランティアの人たちが主に作業)。布紐をつけると、さらに作業量が増える。

※脚本・台本の整理・分類・データベース化については、すでに実績をあげている上記のような既存の組織との協力体制を、今後ともさぐっていきたい。

ただ、専門図書館はそれぞれ独自の分類やデータベース化の方法をとっており、相互乗り入れができるかどうか、今後の研究課題である。

### ジャンル分け

放送の作品自体はスタッフ、出演者など多数の関係者によって出来上がるものだが、脚本・台本は「個人的な作業」の側面が強い。特にドラマやドキュメンタリーの場合、書き手の独自の視点、視角、美意識、問題意識等が強く反映され、それ自体でひとつの「作品」といえる。

当協会の一人、倉本聰氏はかつて「シナリオ文学」という用語を使い、自己の脚本を単行本として出版し「文学」の1ジャンルと

して位地づけるべく努力をしている。シェークスピアやチェーホフなどの例をひくまでもなく、戯曲はすでに「文学」の1ジャンルとして確立している。

向田邦子、早坂暁、市川森一氏等の脚本は書籍に収録され市販されている。

こうした観点から、「ドラマ脚本、ドキュメンタリー台本」など基本的に一人でかかわる脚本・台本は「作家の個人別」に保存・管理することが望ましい。

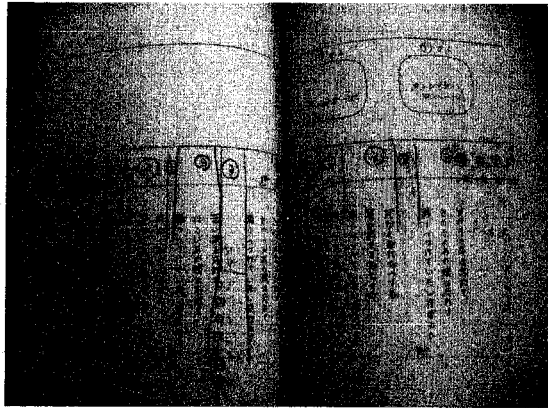
一方、バラエティ、情報番組、ワイドショーなどは複数の構成作家がかかわっているケースが多い。したがって、この分野は「番組別」に分類して保存することが考えられる。

ジャンルわけとしては「実態調査部」が大きく分けて以下のような分類をしている。

- ★映画（邦画、洋画）
- ★ドラマ（国内、国外）
- ★娯楽バラエティ
- ★情報バラエティ
- ★アニメ
- ★その他（劇場中継その他）

これは過去の台本調査の段階で出てきたもので、時代をへるに従ってジャンル間の壁がなくなっている。例えばドラマとドキュメントやバラエティが混在した作品も生まれしており、次第にジャンル分けがむずかしくなっている。

そこで年代別に保存・管理することが考えられる。テレビが誕生したのは昭和28年であり、当初は生中継、生放送が主体で、モノクロ画面だった。さらにカラー化され、技術面で飛躍的な発展があり、作り方も多用化した。そこで例えば次のような分類を考えた。



- ★テレビ創成期からカラー化の時代まで。  
(昭和 28 年から東京オリンピックが開催された昭和 39 年まで)
- ★カラー作品が主流になるものの、ロケなどではフィルム撮影が主流であった時代。  
(昭和 40 年から昭和 53 年ごろまで)
- ★ENG (エレクトリック・ニュース・ギャザリング) が導入され小型カメラでのロケが日常化した時代。  
(昭和 53, 4 年から現在まで)

いずれにしても、作者別、番組別、年代別などの検索で、利用者が求めている作品に簡単にいきつける必要がある。

当部では、すでに収集した脚本・台本について分類ソフトを使って、「作品名」「脚本家、構成作家」「放送日時」「放送局」「出演者」…等々のデータベース作りの作業をはじめている。

次年度では、脚本アーカイブズ独自の分類システムの構築にむけて研究を深めたい。

### デジタル化についての考察

全世界的にパソコンの普及が進み、今やインターネットを利用している人は、我が国だけでも数千万人になるのではないか。

こうした中、情報の電子化が進み「電子政府」といった言葉も生まれている。

作品のタイトルや作者名、放送年月日、放送局名などのデータベースは、デジタル化が必要だが、内容の「長期保存」、つまりアーカイブという観点に立つと、いろいろと問題点が指摘されている。

アーキビストの小川千代子氏はじめ、IT 技術に詳しい委員からも、現時点で内容をデジタル化して保存することには疑念が出された。疑問点は3つに集約できる。

- ★ひとつは、電子記録そのものへの「安全性への疑問」である。まだ電子記録は脆弱であり、偶発的事故による記録消失が絶えない。
- ★ふたつめは、読み出し機械の安定性への疑問。コンピューター技術の進歩発展はめざましく、新バージョンや新しい記録装置の出現で、古い装置に記録した記録が読み出せなくなる可能性がある。現在、主流となっているCDやDVDなどのメディアや、ウインドウズ、マッキントッシュなどのOS、さらにワードなどのソフトウェアにより作成されたデータ自体も、いずれは古び廃れ、なんらかの理由でデータが読み込めなくなる、再変換時に問題が起きるといった可能性も否定できない。

★みつめは、経済的な負担への疑問。技術的に古くなった電子記録は、その時々適切な形に変換処理すればいいという見方があるが、これに要する費用は馬鹿にならない。例えば100年保存を考えた場合、日進月歩で5年ごとに新しい記録装置が生まれると仮定すると、変換処理を19回行わなければならない。記録文書が膨大になると、この経費も莫大になる。

「現物」の「長期保存」というアーカイブ

ズの基本に立てば、もっともなことである。

先述した3つの専門図書館・博物館では、脚本、シナリオの内容のデジタル化をしていない。

ただ、「一般への公開・利用」という観点にたつと、アナログ変換を前提とした「複製物」(クローン)の作製及びデータのデジタル化などは避けては通れないだろう。傷ついた脚本・台本を直接、多くの人の手に触れさせると、たちまち劣化し、判読さえ出来なくなる恐れがある。

現段階までの調査研究でいえることは、

★長期保存に関しては、現時点ではデジタル化はなじまない。従って「現物保存」が相応しい。ただ、書籍に較べて劣化が激しく、既に劣化しているものも多いので、その対策をどうするか。古文書のように、限られた点数の場合と違い、テレビの脚本・台本は何10万、何100万冊と膨大になるので保存場所や長期保存のための処理をどう効率化し、安価に行えるか、今後の重要課題である。

★閲覧等に関してはデジタル化、メディア変換による可能性をさぐりたい。

IT技術は日進月歩で、今日は新しい技術でも明日には古くなってしまう。IT技術の発展等も視野におき、次年度以降の研究課題としたい。

### 利用者への還元と情報の活用

どんなに文化価値や史料価値が高いものでも、死蔵しては意味がない。膨大な脚本・台本を、どのように利用者に利用してもらうかについて研究した。

この問題は著作権がからむので、まだ研究の入り口段階である。

図書館のように現物を直接「閲覧」に供す

ることは、傷みの問題もあり、現物が1点きりというケースが多いので好ましくない。一般利用者の「閲覧」として考えられる方策として、

#### 現物を複製したものを閲覧

著作権をクリアし、なおかつ個人情報保護法に抵触しない脚本・台本を、例えば「公開委員会」をつくり、そこで選んだ脚本・台本を適宜「複製物」(クローン)にして一般公開する。

この場合、アーカイブという現物保存(オリジナル)を最優先とした観点から見ると、「現物」→原則として「アナログデータ変換(マイクロフィルム等)→「アナログデータ変換」(複製物・紙媒体)という形が望ましい。

#### 脚本・台本の内容を一次データ化して閲覧

閲覧条件をクリアした脚本・台本の「現物」を→原則として「アナログデータ変換」(マイクロフィルム等)→「デジタルデータ変換」(各種画像フォーマットなど)とする。

画像フォーマットには「TIFF・JPEG」などの種類があるが、内容そのもののデータベース的な閲覧をするなら、世界標準規格となっている「XML」を使用するなどの方法もある。

今後の研究を待たなければならないが、来館しパソコンの端末機で閲覧することが基本となる。

#### 一部会員、研究者のみに閲覧

放送ライブラリーなどが採用しているもので、特別の「研究室」を設け、「放送と放送文化を調査・研究する人」に閲覧の便宜を提供する。

放送ライブラリーでは、利用できる人について、放送・広告関係者、教育・研究者、大学院・大学、専門学校、高校、中学校、小学



校の教員、大学院・大学等の担当教員の推薦を得た学生、放送ライブラリー館長が許可する方等に限定している。

#### オンデマンドによる提供

希望者に「出版」という形で「提供」する。その場合、少部数出版に有利なオンデマンドを活用する。

脚本・台本の中には、それ1点だけでは面白さがわからないものがあるが、例えば数10回におよぶ作品に宿されている膨大な情報を、1冊の本をつくるように編集し、コンパクトにまとめたものを、オンデマンド出版で印刷して希望者に有料が配布する……といったことも考えられる。オンデマンドの場合、その時点でデータ化が必要になる。

所蔵した脚本・台本を、どこまで公開するか。この問題は著作権や個人情報保護法などもからむので、簡単ではない。

昔の脚本・台本には出演者の所属事務所の電話番号や個人事務所の住所、電話番号などが記されたものや、手書きの私的なメモなどが記されているものもある。

有名俳優のちょっとしたコメントや、台詞を覚えるための独自の工夫や、役作りのためのメモなどもあり、これはこれで貴重な資料ではある。

脚本・台本には膨大な「情報」が詰め込まれているので、例えばドラマ脚本を活用し「別れの言葉」「届く言葉」といった「特集」の出版などに活用することも考えられる。

集めた脚本・台本を、どのように公開し、国民にどのように利用してもらうか。この問題については、上記のような種々の問題がからむので、まだ脚本アーカイブズ準備室として意見集約が出来ていない。今後、著作権とのからみなども考慮し、専門家を招いたりして研究を深めたい。

ところで、NHKでは公式ホームページ上で、すでに放送された番組の脚本・台本を「デジタル教材」として無料で公開している。

教育番組の「台本を読む」のコーナーで「放送の内容をもう一度みたい人のためのコーナー」と記されている。

脚本アーカイブズでも、「長期保存」とは別に「当面の閲覧サービス」の一環として、メディア変換を視野におき、効果的な方策をさぐっていききたい。

例えば、こんなことも考えられる。ホームページを作成し、条件をクリアした脚本・台本をインターネットを通じて希望者に読んでもらう。有料か無料かは判断のわかれるところであるが、「脚本家になりたい人は常時10万人ほどいる」と俗にいわれる時代である。

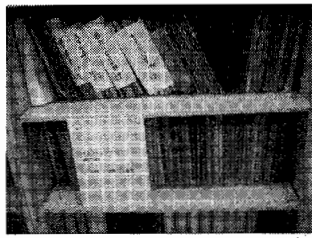
ドラマ脚本を例にとれば「企画書」から「箱書き」「第一稿」「第二稿」……さらには演出のコンテなどもインターネット上で閲覧できれば、大いに勉強になる。

将来的には次ぎのようなことも可能になるのではないか。インターネット上に呼び出した脚本・台本をワンクリックすると、その脚本・台本をもとに映像化した作品に飛び、作品を視聴できる。逆に、作品を画面で見ている、この脚本・台本に飛ぶことも考えられる。

この場合は有料であり、テレビ局や制作会社等との提携が必要になってくるが、脚本アーカイブズ独自の収入源のひとつとなっていくだろう。

## おわりに

脚本アーカイブズの最大の課題は、収集した脚本・台本を、いかにして「現物のまま」長期保存すると共に、保存された膨大な情報を、利用者にどう還元していくかである。



もともと「長期保存」を前提としていない記録物なので、書籍などに

較べて劣化も早く、しかも限られたスタッフ、関係者にしか配布されない。

この20数年ほどで録画装置が普及し、作品の二次三次使用によって「ビジネス」として活用できることがわかってから、制作側も作品自体の長期保存を真剣に考えるようになった。

しかし、脚本・台本についてはまだ「制作されれば終わり」という状況にある。1冊1冊はたとえ「とるにたりないもの」であったとしても、10万、20万という「山」になり、さらに時代が移ると、「とるにたりないもの」の集積が、「宝」となることは十分考えられる。

その時代に大した「価値」がないと見なされた物や情報が、時代の経過とともに大変な価値をもつことは、しばしば見られることである。「骨董的価値」とは別に、脚本・台本が20万、30万冊と集まれば、そこに含まれる情報は膨大であり、社会史的、文化史的に重要な価値をもつはずである。

脚本・台本は完成された「作品」とちがって、それ自体では「青写真」のようなもので、「不完全」といえるかもしれない。しかし、それが逆に強みになることもある。脚本・台本は基本的に文字や数字によって出来ているので、映像と違って細かいデータ検索をしやすいし、まとまった情報を取り出しやすい。(この観点にたつとセキュリティの問題があるにしても、メディア変換の必要性が出てくる)

現在、新聞の縮刷版が、過ぎた時代の社会や政治、経済、風俗等を知る上で、極めて貴重な情報源になっている。同じように、「時代を移す鏡」であるテレビの脚本・台本には、その時代の風俗はもちろん、大衆の嗜好や趣

味、風俗、流行、社会についての情報が極めて豊富にとりこまれている。

テレビ関係者なら自明のことだが、意味のある映像は、「言語」「ことば」が基礎になっている。そうして、作品の出来不出来に脚本・台本がいかにか大きな役割を果たしているか。テレビを見ている多くの人に知っていただきたいものだ。

余談ながら、カンヌ映画祭で2度の受賞に輝いた今村昌平監督は、

「映画の出来不出来の7割はシナリオ(脚本)にかかっている。役者が2割で演出は1割です」と話していた。

放送においても同じである。脚本・台本がいかにか大事であるか。言葉表現の劣化がいわれる昨今、脚本アーカイブズを実現させ、特に日本の明日を担う若い世代に「言葉」の大切さを再認識してもらいたいものである。

豊かな言語駆使能力があつてこそ、ものごとを深く味わい深く考えることができるし、劣化がいわれている「対人コミュニケーション」能力も養われるに違いない。

この数10年、顕著になった「国語力の低下」「活字表現軽視」の流れは、国民の思考力低下、知力低下に通じ、文化の衰退につながりかねない。脚本アーカイブズの設定によって、「映像作品」のもとになっている脚本・台本への興味が増すことは、教育の見地からも大事なことだ。

いうまでもないが、脚本・台本は「言語」による表現である。言葉からイメージを喚起させる能力を養う上でも、脚本・台本はもっと読まれるべきだろう。

将来的には脚本・台本を教育の現場で活用することも視野にいれて、更に研究を深めたい。

(報告：香取俊介。調査・データ収集：高谷信之、馬場絵麻、高梨安英、川添法臣)

# 脚本・台本アーカイブズの課題

社団法人 日本放送作家協会常務理事  
日本脚本アーカイブズ特別委員会顧問

水原 明人

## 初年度の収穫

今回、放送台本についての実態調査、会員へのアンケート、収集・保存・管理の方法をどうするかなどの研究を行ったことの最大の収穫は、今まで漠然と考えられていた台本保存の現状や将来の管理についての不安が、極めて具体的に数字の裏付けをもって実感されたことだった。

例えば、放送にかかわる作家の八割以上が過去の台本を保存し、それらを貴重な文化遺産と考え、脚本アーカイブズが出来たら自分の台本を寄贈したいと思っていること。にもかかわらず、現実にはその台本が家の改築や引っ越しなどの際に処分に困り、一部の遺族や業者の手によって廃棄されていることなどである。

我々はNHK放送博物館、放送ライブラリー、松竹大谷図書館、早稲田演劇博物館、国立演芸場など演芸映画関連施設や放送局の一部に放送台本が収蔵されていることは知っていたし、そういう施設に台本の保存を委託したらという識者の声もあった。しかし、今回の調査で分かったことは、その実態はお寒い限りで、収蔵の多くは映像作品と過去に出版された書籍に限られ、放送台本の場合は各種受賞作品、有名作家の、それもドラマ脚本に限られているところが殆どだった。しかも、今後の方針として本格的な台本の収蔵を視野に入れている施設は皆無に近かった。

## これからの課題

アーカイブズの目的はドラマ台本だけの収集・保存ではない。その多くが放送終了と同時に捨てられてしまう娯楽番組、情報系番組などの台本が五十年、百年先の貴重な文化遺産になるであろうことは、ほとんどの作家がアンケートの中で実感をもって答えている。しかし、それらの台本を過去にさかのぼって収集し、長期にわたって保存、管理するのは容易なことではない。放送台本はその性質上きれいに製本されたものではなく、作者、演出者などの書き込み、書き直しのあるものほど貴重な資料になる。しかし、そういう原台本は傷みやすく、保存が難しい。さらに将来一般の人達への公開・利用を考えると台本の複製化を視野に入れないわけにはいかないし、公開の場合は著作権の問題も発生する。具体的には予算を含めてどうするかはこれからの大きな課題だろう。

こういうさまざまな問題を考えている間にも大切な放送台本が次々に失われていく。呑気に構えてはいられないのである。脚本・台本アーカイブズの将来を見据えて、慎重に、しかしことは急がねばならない。それが我々の現在の最大の悩みである

# 〈 議 事 録 〉

平成15年(2003年)3月25日、国会で「テレビ放送50年を機に国会議員がテレビ放送の現状と問題点を知りたい」という意図のもとに総務委員会が開かれた。評論家、田原総一郎氏、上智大学助教授の音好宏氏、日本放送作家協会理事長で脚本家の市川森一、計三名の参考人が招致され、それぞれ今のテレビ放送の現状を報告した。これはその際の議事録である。

第9号 平成15年3月25日(火曜日)

会議録本文へ

平成十五年三月二十五日(火曜日)

午前九時開議

出席委員

委員長	遠藤 武彦君		
理事	荒井 広幸君	理事	佐藤 勉君
理事	林 幹雄君	理事	八代 英太君
理事	安住 淳君	理事	武正 公一君
理事	榎屋 敬悟君	理事	黄川田 徹君
	浅野 勝人君		伊藤信太郎君
	岩永 峯一君		上川 陽子君
	左藤 章君		佐田玄一郎君
	谷 洋一君		谷本 龍哉君
	野中 広務君		平林 鴻三君
	宮路 和明君		吉田六左工門君
	渡辺 博道君		荒井 聰君
	伊藤 忠治君		大出 彰君
	玄葉光一郎君		島 聡君
	中沢 健次君		松崎 公昭君
	山田 敏雅君		山元 勉君
	山名 靖英君		山岡 賢次君
	春名 直幸君		矢島 恒夫君
	重野 安正君		横光 克彦君
	金子善次郎君		三村 申吾君

総務大臣政務官

岩永 峯一君

総務大臣政務官

吉田六左工門君

参考人

(評論家)

田原総一郎君

参考人

(脚本家)

市川 森一君

参考人

(上智大学助教授)

音 好宏君

○市川参考人 田原さんのお話は、議員の皆様には極めて直結したお話だろうと思いますけれども、私はテレビドラマのシナリオライターの立場での話でございますので、どうぞお気軽な気分でお耳をおかしいただければと思います。

テレビが生まれましてちょうど50年がたちました。こういう節目の年に、もう一度、テレビ文化とは何か、こういうようなことを議員の皆様にご覧いただきという形で総括をしていただくということは、私どもにとりましては非常にありがたいことだし、テレビ文化と言われるこの社会全体にとっても重要なことではないかというふうに思います。

私は、テレビにかかわりましてから37年、この業界で禄をはんでまいりましたけれども、その立場はテレビライターという立場でございますので、テレビ全体を語ることは毛頭できません。本当にマンモスのつめの先ほどのところで生きてきた、その範囲のことを皆様にご覧させていただくということを御了承を得たいと思います。

37年テレビにおりますと、大体テレビの創成期からかかわってきたこととなります。振り返ってみますと、やはり高度成長とともに活況を呈しました創成期、これは60年代ということになりますけれども、60年代から70年代の中盤、そして80年代に入りますと、何となくテレビが制度疲労を起こしているのではないかというような諸問題がいろいろ出てまいりました。そして、恐らくその打開策というようなことも含めてございましょうけれども、ハード面では、多チャンネル化そしてデジタル化というような方向に向かい、組織的には、制作現場を切り離していくというような分散化、多極化の方向へ90年代以降は向かっているように思われます。

一口に申しますと、当初はいわゆる制作中心、いわゆる現場中心から、編成、営業、デスク中心へその司令といいますか、中心が移行していったように思います。

その制作現場というのも、初めは、つまり60年代から70年代は、ディレクター中心の時代と俗に言われている時代でございます。テレビがとにかく右も左もわからないところからいきなりスタートして、やはりどういうものをつくれればいいのかというときに、その最前線にいるディレクターが中心になって物をつくらなければならなかったということは当然のことだったろうと思います。そういう中で、私どもドラマの世界では、和田勉とか、「私は貝になりたい」というようなものをつくりました岡本愛彦さんとか、「マンモス・タワー」というような当初の名作をつくりました、初代テレパック社長の石川甫さんとかというような有名ディレクターが続々と出てきた時代でもございました。

その次、70年代中盤から以降、短い期間ではございましたけれども、脚本家の時代と言われる時代がございました。御存じかと思いますが、亡き向田邦子、倉本聰、山田太一、早坂暁というような名立たる脚本家が活躍をされましたのは、主にこの時代がございました。近年、NHKでは、テレビ50周年を記念した番組が多く放映をされておりましたけれども、その中で、この50年の代表的なテレビドラマというようなものがNHKを中心に紹介をされましたが、それらの作品は、ほとんどが、この脚本家の時代と言われていた時代に生まれた作品ばかりに集中をしているということも一つ特徴的なことでございました。

脚本家の時代が終わりまして、少しすべてが秩序化されていく、あるいは管理化が強くなつてまいりますと、プロデューサーの時代というような時代が参りました。そして、それを経て瞬く間に、つまり、テレビ局が制作の現場を、効率化も含めてでしようけれども切り離していく。民放ではTBSなどが率先してそれをやっておりますけれども、制作というのは、スタートのときにはまさにテレビ局の中心であったはずのものでございますけれども、これが90年代以降になりますと切り離されていく。

そして、テレビ局そのものは、編成を中心にした、本当に参謀本部とでも呼べるようなもの

だけが残って、制作は、第一制作、第二制作、第三制作というようなものが、それぞれのTBS何々プロダクションというような、名前を変えて切り離されていく。そして、プロデューサーというのはそういうところに配属をされる。そしてかつ、それぞれの制作が、さらに町場のドラマの制作プロダクションに下請を出していく、下請のまたさらに下請が出されていくというような状況が生まれております。

こういうふうに、司令と制作というようなものが今のようにばらばらな形になりますと、一本のドラマをつくるコンセプトというものも極めてあいまいなものになってしまうのは当然のことだろうと思います。

つまり、いいドラマだの内容がどうだのというようなことが、こういうばらばらな系統の中で、統一的なテーマ性というようなものを語ってそれが統一できるわけではなく、それをまとめるには、一番簡単な、つまり数字が便利なのでございまして、視聴率をとれというようなことが発せられますと、それは一遍に末端まで浸透いたします。そして、一本のドラマをつくるそのスタッフたちは必ずしもドラマティストばかりではなく、ドラマのことは全くわからない人たちでも、視聴率をとりなさいというような指令は極めて簡単に言えることでありますし、そういう一言でドラマづくりに参加ができるというようなことでドラマがつくられているということは事実でございます。

結果として、その全体のコンセプトというものは、内容を離れたところで、共通目標として、数字をとれ、視聴率をとろうということでのどのドラマも制作に向かってまいりました。

そうしますと、視聴率をとるにはどうすればいいのかというようなことは、あらゆるデータがありますが、すべての統一したデータが語る場所では、やはり人気タレントをつかまえれば視聴率がとれる。キムタクと松嶋菜々子なら間違いなく、どんな内容も問わない、キムタクが出るのならもうそれでゴーだというようなことが現状でございます。

そうしますと、ディレクターの時代、脚本家の時代、プロデューサーの時代を経て、今は、では職業でいうと何の時代かといいますと、芸能プロダクションの時代というようなことも言われております。つまり、人気タレントを抱えているプロダクションが一番主導権と発言力を持っているというような中でドラマがつくられております。

その結果、人気タレントに頼った連続ドラマが、去年、2002年は160シリーズつくられました。単発ドラマ480本は非常に多い数だろうと思いますけれども、驚くべきことは、この大半がサスペンスドラマ。かつての山田太一や早坂暁の「夢千代日記」というようなドラマは影を潜めてしまいました。そのほとんどがサスペンスのドラマ。人間性の、愛とか真実とかというようなものを追求するのではなくて、滑った、転んだ、だれが犯人かというようなドラマが主流というよりも、ほとんど全部と言ってもいいくらいの驚くべき状況を呈しております。

そういうドラマ群というのは、では一体どのくらいの制作費でつくられているかといいますと、単発ドラマといいますと、大方がサスペンスドラマ、2時間、ゴールデンタイム、8時、9時、10時というような非常に放送料の高い時間帯の中では、約5000万円の制作費が平均とされております。

私どもが一番関心がありますのは脚本料ということになります。制作費の内訳もございしますが、あと5分でございますので、もう手短かに申し上げます。脚本料が、2時間で70万円から、一番高いところで400万円でございます。これは、欧米の脚本料というのは制作費の約一割と言われる状況の中では、極めて低い査定がされていると言ってもよからうと思います。しかも、その一本400万円を取る作家は十指おりません、10人おりません。

御承知のとおり、不況によって制作費はこの20年間ダウンの一途をたどっております。今、ライターの数は約千人おりますけれども、そのうち、去年連続ドラマを担当した脚本家は85名にすぎません。400万円の作家たちというのは、ほとんど仕事がありません。多くは、使い勝手のいい、ランクの安い脚本家がどんどん起用されては使い捨てにされていくというような状況でございます。つまり、シナリオライターとしても、特に人間を描けているなどという作家はかえって邪魔でございまして、恋愛ドラマとサスペンスドラマを器用にかけるライターであれば、一番そういうライターが重用されるというのが悲しいかな現状でございます。

テレビドラマは社会全体のニーズにこたえているかといいますと、これもノーでございます。視聴率競争の中で多くの視聴者そのものも切り捨てられて、恋愛ドラマとサスペンスドラマに偏っているという現状でございます。本来は、社会はもっと価値観の多様な中にあるわけですが、そこに合わせた、百花繚乱のいろいろなジャンルのドラマがそこにあるという姿が最も健全な状況ではないかと思うんですけれども、そういう状況とはほど遠い実情が現実でございます。

私どもが抱えております問題は、ドラマづくりに必要な中心が喪失をされている。つまり、だれも決定権を持たなくなってしまう。第二に、ランニングコストに追われる制作現場の中で、有能なライターがほとんど仕事を失っている。そういう状況の中で、私ども日本放送作家協会は、放送作家の社会的地位の向上というものをここ30年間叫び続けておりますけれども、それもほとんど、実情はドン・キホーテ的な妄想というような認をされております。

もし、テレビドラマも映画、演劇同様の文化芸術としてお認めいただけますなら、具体案を私どもは提示しているんです。さまざまな具体案がありますが、もう時間もありませんので、一言だけ提案というか、この場をかりてお願いをさせていただきたいんです。

私ども放送作家は、シナリオ、放送台本の資料館が欲しいんです。つまり、シナリオライブラリーというようなものがぜひ欲しいんです。これは欧米にもございます。この東京には、これだけテレビ文化と言われる中で、テレビ台本、シナリオのライブラリーが全くないということは本当に悲しい状況でございます。何とかシナリオライブラリーというものを東京のどこにでもいいからつくっていただきたい。

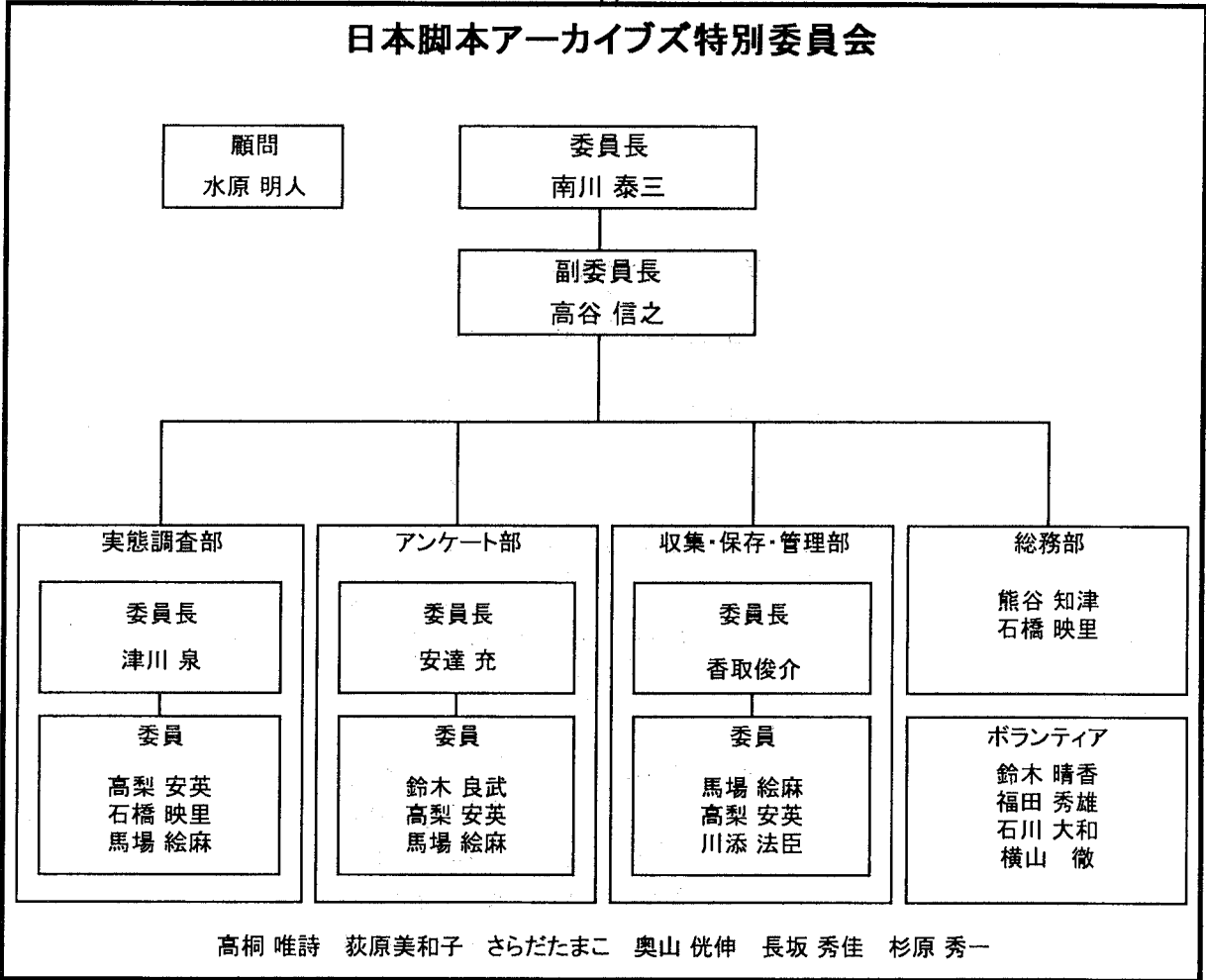
現状はどうかといいますと、本当にすべてのドラマが電波の藻くずと消えております。そして、台本だけがそのよすがとして残るわけなんですけれども、それも、作家それぞれの個人の所有としてしか残っておりません。その作家が亡くなりますと、それもまた捨てられてしまう。有能な作家たちがどんどん死んでいく中で、私たちは、奥さん、遺族に頼んでその脚本をお預かりして私どもの協会の倉庫にためておりますけれども、とにかく、ほっておきますとなくなってしまう。しかし、それももう、今は倉庫いっぱい行き場がない状況でございます。

これを何とか、テレビをもし文化というふうに認めるならば、つまり、現場は一過性のものでもいいんですけれども、やはり、その質の向上とか、それを系統立てて研究していく、過去はどんなものがあつたのかというようなものを系統立てていく、音先生みたいな方には絶対必要なそういう資料館としても、私どもは、シナリオそして放送台本というようなものの保管をしていく、そういう手だてを何かお考えいただければ大変ありがたいことだと思います。

申し上げたいことはまだほかにもたくさんあつたんですけれども、時間切れでございますので、そのことだけをお願いして、終わらせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

社団法人 日本放送作家協会  
理事長  
市川 森一





# 日本脚本アーカイブズ調査・研究報告書【I】

脚本・台本の現状と管理・保管の実態

平成18年(2005年)3月25日発行

発行 社団法人日本放送作家協会  
日本脚本アーカイブズ特別委員会

〒106-0032 東京都港区六本木6-2-5  
ハラビル1階

TEL 03-3404-6761

FAX 03-3479-4250

準備室

〒120-0034 東京都足立区千住5-13-5  
学びピア21 5F

TEL 03-3882-1071

FAX 03-3882-1073

E-Mail : nka@star.ocn.ne.jp

発行人 市川森一

編集人 馬場絵麻

この冊子は日本脚本アーカイブズの内部研究資料につき、  
二次利用その他の際は、必ず日本脚本アーカイブズまでご連絡ください。



文化庁

AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

平成17年度文化庁芸術団体人材育成支援事業

# 脚本・台本は貴重な放送文化遺産です

社団法人 日本放送作家協会



平成17年度文化庁芸術団体人材育成支援事業